

山形短期大学民話研究センター資料叢書

牛方と山姥

海老名ちやう昔話 第一集

編 武 田 正

牛方と山姥

海老名ちやう昔話 第二集

牛方と山姥	5
蜘蛛の化物	7
化物むかし	10
蛇むかし	11
団子どの	13
笠地蔵	16
猿と蛙	18
かわうそと狐	20
文福茶釜	22
おりや峠	24
狐むかし	26
二話	

股大根	5
猿蟹合戦	7
酒呑童子	10
舌切雀	11
こぶとり	13
猿むかし	16
貉むかし	18
猿賀	20
菖蒲湯	22
食わず女房	24
二十四孝	26

29	31	36	41	46	47	48	49	53	54	55
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

養老の滝
 瓜姫子と天邪鬼
 糠福と米福
 くいごこむかし
 狸むかし
 しっぺい太郎
 馬と犬
 南瓜と栃の実
 雪女房
 幸福な城
 狐女房
 靴屋と金持
 代りの首吊り
 鶴女房

87 85 84 82 81 80 79 78 76 70 64 61 58 56

かしかと烏と亀の子
 橋と大根
 じいさんと若衆
 狼と狐
 卵うり
 糞くらえ
 ねずみの嫁
 あとがき

97 94 93 92 91 89 88 87

凡例

- 一、昔話の配列は話を聞いた順にした。
- 二、地方独自の言い廻しにはルビを振った。
- 三、題名は、なるべく話者の言う通りにしたが、二、三のものは「日本昔話集成」によったものがある。
- 四、読み易いように、会話は「」に入れたが、実際は連綿とした話し方である。

海老名ちやう

山形県西置賜郡白鷹町滝野 八十一才
(出身地 白鷹町畔藤)

牛方と山姥

夕方になったもんだから、

「早く歩^{あえ}べよ、早く歩^{あえ}べよ」

と、牛はめいめい啼くど。そうすつど、
おうおうという音するので、誰か来たか
と思つていっど、

「からうお一本呉^けろ、からうお一本呉^けろ」
と、音立てる化物だつたど。

「ほう」

と、うしろさ投げてやつど、ガリガリ
ガリガリと音する。牛は啼^{べこ}いていて、

「早く走れ、早く走れ」

と言うげんども、牛なもんだから、

ウオーンウオーンというて走らんねので、
化物は皆食い上げて、あづくには、

「牛まで呉^けろ」

と言わつだど。何とも仕様ないから、
少しむごさいげんど、牛置いてわらわら
と行つたば、牛はめいめいと啼いていた
が、音しねぐなつた。食つたなと思つて
いるうちに、ぼつこれ家あつたから、入っ
て梁の上さあがつて見つだところあ、そ
こは化物の家だつたど。

化物入つてきて、

「からうおも食つたし、牛も食つたし、
何とも腹くつちいげんど、酒でも温^{あた}めて
飲むかな」

と言うて、鍋さ酒温めて、大きな背中、

火さ向けて背中あぶりして、克蘭クラ
ンと眠むかけしつたうちに、天井さ青芋^{おの}
殻^{がら}あつたので、それで酒ばツーツーと皆
飲んでしまったど。

化物は目覺まして、

「火の神さま上ったか、火箸の神さま
上ったか」

と。

「そんでは、餅でもあぶつて食うか」

と言うもんで、戸棚あけて餅あぶつた
ど。片端からあぶつて、ホカホカとふく
れたの、チクリチクリと刺して、皆天井
さ上げて食ったど。

「今日は牛も食ったし、火の神さまでも
上ったから、寝んべ」

と言つて、

「今日は、あんまり重たいから、石の唐戸^{からと}
でなく木の唐戸さでも入つて寝んべ」

と寝たと。そしたば、があがといび
きかいたから、下ささがつて来て、唐戸
さ錠かけて、火焚いて湯をわかつて、キ
リキリキリと、キリで穴あけたど。

「こりや、隣のキリキリ虫、さやずるほ
に」

と寝つだつてな。そして煮立つたな湯
ば、じゃじゃと掛けたど。そしたら、

「助けて呉^くろ、助けて呉^くろ」

と言つたど。そしたら、

「助けらんね、牛まで食つた敵かたきとつてくれる」

と、音立てて殺したど。そして開けてみたら、下駄の化物だけど。

んだから、きれいに仕末しておくもんだ。

蜘蛛の化物

むかし、ある寺さ化物出るんだつたど。
「荒い人、こつちさ来る」

という話で、その人をお迎え申して、
退治してもらうことになつたど。その人

は鬚生はやして、袴はいて、とんでもない人であつたど。

「ここらに化物出だずあ、あるどから、そこさ俺は来たどこだ」

と言うので、みな大喜びで、その寺さみんな行つてみたところあ、蜘蛛の巣だらけの、とにかく昼間だつて暗いような、恐ろしいような寺だつたど。その人あ、その寺さ、夕方入つて、

「いいから、貴様だ酒持つてこい」

「ほんじや、酒などなんぼでも上がつておくやい。焚物もたくさん持つて来たから……」

「あとはみんな帰れよ」

と、火どんどん焚いて、いつ来つかと酒飲んで待つてだど。

そしたところが、襖の向うで、音するので開けたれば、一つ目の大きなオデンプチ来たつけど。そいつとにらめっこしたらば、そいつは居なくなつたど。そしたらまた生臭いような風吹いて来る。そしたら、

「今晚わ、入つてええがんべが」

と三味ひいて女が来て、

「俺は目が見えないで、ごめんなさい」

そして上がつて、とにかく溶けるような三味ひいて、唄うたつて、眠むかけ出るごで。それから、

「俺あ小便しに行つてくるから、この袋を決してお前いじんなよ」

と置いて行つたど。やっぱし見たくなつて、そつと引き寄せてみたところ、ピタツとひつついて、手動かねくなつた。こんどこっちの手剥すべと思うど、こちの手も握らつて開かねくなつた。

「さあ困つた。あれが来るべ」

こんどは足掛けて取んべと思うど、足もひつついて、動かねくなつた。

「そりや、いじるなと言うのに、いじつたな」

と、ガラガラつて、舌出して笑つていと、その人はいろいろな神さまにお願い

いしたど。そしてクランと掛けらった時、神さまのおかげで、ちよつと右手は直つたど。その右手で剣を抜いて戦つたところ、キヤーツといって逃げて行つたど。

朝げに、みな来るばり待つていたつけど。そうしたところが、

「食くわつたべはあ…」

という音して、

「いたか、いたか」

「いたいた」

「化物であんめえか」

「いや、ほでないから早く来て呉けろ」

と呼ばって、

「確かにキヤーツといつて行つたから、

血あんべがら、そこ辿つて行つてみる」

みんなは湯わかつて、ペタペタ体に喰付いたのを取つて呉れたりして、

「蜘蛛の奴であんめえか、鳥餅もっちみたいなもんで、ひつついた」

そしたれば、仏壇の方まで血流して、

仏壇どこさ穴あけて、そこから出て人喰つたもんだつてな。それから仏壇どこで喰り音する。見たれば光る。

「煮湯かけろ」

と、みなでヤアヤアかけだば、夫婦の蜘蛛の化物だつたど。とうびんと。

化物むかし

神さまのところに、化物巢食つてな、
のんべにきかない子どもなど食いたがつ
たど。んだから大人しくしてんなねぞ。
荒い人が行ったら、チヨコチヨコと歩
いで来てケラケラと笑つてだ。

「そがえに上手に化けられっこんだら、
姉さんに化けて来らんねが」

と言うたら、姉さまに化けて来た。

「こりや、なんぼも上手に化けて来られ
る。ほんだらば、俺あ納豆餅さあ好きだ
から、納豆餅に化けらんねが」

ほしたら、納豆ほやほやとして、ちょ

こちよこと歩いで来たど。

「これは上手だ。もつと小っちゃくなら
んねが、小っちゃぐならんねが」

と言うと、小っちゃくなつて、手の上
さあげて呑んでやられるようになったつ
て。そこでストンと呑んでやつたど。そ
したところが苦しくて毒消しの草、土手
さ行つて食つたば、化物は溶けて、屁に
なつてしまつたど。んだから化物なて、
恐おっかなくないから、夜小便たれに行かん
ねて、いらんね。とうびんと。

化物むかし

むかしあつたど。

神さまに、毎晩げ、ちようちんの化物
出つかつたど。何化物だかと思つて行つ
たば、踊りおどつたど。

「俺あ、何の化物だ。あんだ何の化物だ」

「俺あ、ちようちんの化物だ」

と言うもんで、負けんな負けんなと

踊つたど。そうすつど、

「また明日の晩あしたげ来つからな」

と歸つて来た。

「ちようちんの化物？」

と、ここらにちようちんあるかもしれん

ねえ、と見たら、古ふるけたちようちんが、
虫喰つて仕末しないもんだから、そいつ
を仕末して貰いたくて、仕末しろと出て
きたんだど。んだから仕末もしないで
押つけておくと、みな化物になつて出
はつて来る。とーびんと。

蛇むかし

山シ中の一軒屋に親子三人住んでいて、
その娘は機織りの上手な娘で、毎晩機織
りしていつど、一度何なもんだか、とて
もええ男が姿現わしたど。そうすつど、
どこからこげなええ男来るもんだか、も

のはゆげに、俺どこ見て、話もかけない。

そして三日目の晩に、そのこと親さ話したところが、

「不思議だ。こんどはすっかり機でもなんでも、隙なく掛けてみろ」

と。そしてらまた、ある晩来たど。そしてたところが、これは不思議なもんだから、糸のダンマ（玉）大きく拵こしらえて、その先の針をつけて、男のどこさ行つて、着物さびつしり刺してやれ、と親が言つて、娘はその通りにしたところが、ちよつと姿消してしまつたど。

そうすつど、その糸のダンマがコロコロコ・コロコロと、どこさ転んで行つた

もんだか、転がつて行つた。そうすつど朝げになるばり待つてみたところが、血落して、ずうつと山さ糸ば辿つて行つたつてな。

そうすつど、これは不思議なもんだと思つて、糸をただして行つたところあ、大きな蛇は、うんと苦しんで死んでたという話で、こんどは、

「いや、こんなものに見込まつて困つた。こらあ」

と思つているうちに、自然とその家の人は病気でなくなり、その家も絶えてしまつたという話。

団 子 ど の

おじいさんとおばあさんが、立派に働いて、子どもも持たないがったど。まずねつく穀物など不沙汰にしないで働いていたおじいさんとおばあさんだっただ。ある時、屋敷掃くべと、家の前掃いたところが豆拾って、

「これは、お地藏さまさ、黄粉きなこはたいて、団子上げ申すべ」

と思つて、まずお地藏さまという、仏さま心の内うちで上げ申したという。そうすつど、カタンカタンという音すつからどて、お仏さま来てみたところが、団

子は転んで、コロコロコロと外まで出きたど。そうすつじど、

団子どの 団子どの どこまでござる
石の地藏まで行くどこだ

と言うから、かまわず追掛けて行つたところが、大きな穴さ、チヨロエンと入つて行つたど。そうすつじど、そこ覗いてみたば、広いところにお地藏さまは立つてやつた。

「俺も行ってみつかない」

と思つて行つてみたところあ、お地藏さまの手の上さ、その団子あがつていたど。そうすつど、

「お地藏さま、こんな汚ない団子上られ

んまいから、これは俺が上側食つて、中あがつておくやい」

と進めて、お地藏さまの言うには、

「晚げ、泊つて行つて呉ろ、いや困つたことに、鬼どもら、この間から、まず二階荒して、博奕^{ばくち}打ちということ始めて困つたごんたから、何としたらええがどて、考えていたところだから、今夜一晩泊つて行つて呉ろ」

と。

「まず、二階さ上がるには、俺あ膝さ上れ」

「いや、お地藏さまの膝さなど上がらんね」

「いや、上がらんねど行かんねから、上がれ」

そして、お地藏さまの膝さ上がり、今度あ手さ上がれ、肩さ上がれ、頭さ上がれと。

「いや、頭なの、とにかく何と言われ申したて、俺あ足あ曲つから上がらんね」
「そんでないければ、二階さ行かんねから、梯子の勘定して登れ」

と。そして二階さ上がつて隠つて、押入れの中さでも入つてると、そして、
「一番・二番・三番鶏というように、まずトトケロ・ケーというと、二番三番というと、明け方になつから、それまで帰っ

て行くように、その鶏の真似しろ」

と。そのお地蔵さまに言わつて、そうしているうちに、やつぱり隠つて音聞いっただらば、何処ざあなく集まつて、まづ博奕打ちすると、三時頃、トトケロ・ケーと、一番鶏啼つたから、早くまづ一生懸命。二番・三番鶏、ほんじやまず、明るくなつじど困つから、この銭などかまねではあ、明日の晩来るようにはあ、置いて逃げてあえべと、置いて逃げて行つたど。そうすつど、お地蔵さん、「おじいさん、おじいさん、その金をみな集めて持つて来い。みんな集めてそしてまた頭から降^おちて来い」

と。落ちてこらんねから、仕方なしにお地蔵さんの頭など勿体ないげんども、と思つて降ちて来たらば、こんどはその金みな呉れつから、それで裕福に暮せよと、帰つて来たど。

そこさ、隣のばさま、稼ぎもしないで火貫いに来たば、その米を買つたり、着物を着たりしたところを見て、

「何して、そがえに何処からか盗んで来たか」

「いや、こうこうした訳だ」

「おらも、じさま、やろべ」

と。そしてまず転びもしない団子を、どこに穴ある、と、ずうつと行つてみた

ところあ、大きな穴ある。そこさ行つたらば、やっぱし穴から入れてやって、お地蔵さまさ団子の汚ないどこ進ぜて登れとも言わんねどこさ登つて、頭さ登つていたば、また夜、鬼あ来たど。そうすつど、「いや、みな錢なんとした。地蔵、こりや何とした。ここさ誰も来なかつたか、お地蔵は何かしたでないか」

なんて、うんという声するけど。そしてまた、じさまに聞いた通りに、隣のじさまもしていたところあ、あんまり早く、鶏の声したつてな。

「不思議だな。あまり早いなあ、こりや。こがえに早く夜明けるもんでないんだ」

と言ううちに、また鶏の音させたど。そうすつど、不思議だからというもんで、

「じさま、あの錢よこせ」

「ない」

「隣のじさま…」

なんて言うたつて、分んねもんだから、とうとうそこで、うんと攻めらつて来たど。んだから決して人真似すんなど。

笠 地 蔵

せつせと働いて、夕方米買いに行つたところが道傍のお地蔵さまは、雨あ降んに、笠も着ない、蓑も持たないで、頭か

ら濡れたとこ見て、

「いやいや、こりや米買うどこでないから、蓑と笠を買って、かぶせ申してはあ、行くべ」

と思つて、買つて、まずおじいさん、そうした訳だこで。

「米買つて来ないから、今晚はまず菜漬湯でもして飲んで寝たらええがんべ」

と言つて寝たところさ、何か音あする。ごもごもと音あする。そして段々近づいてみっずど、

「じじ家、^えば家はどこだ。じじばは何処だ」

ずうもんで音あする。

「なえだまず、恐つかないこと。何だかおら家の錠口みたな音するな」

と、二人あガンガンとなつて、寝つたところあ、

「やっぱし此処だ、此処だ」

と言うもんで、ガラリと開けて、じゃがえんと何か投げて行つた音あする。そうすつど、コロコロコロコロなどという音もする。

まず夜明けるばり待ちて、そうして朝げに起きてみたところが、甕さ銭金いっぱい、割れて、コロコロコロコロと、どこぞなく転んだ金だったど。

んだから、正直にすつど、そういう風

に神さまの恵みあるというはなしなあ。

猿 と 蛙 ぶつ

ある長者さまで餅搗いっただ日に、餅食いたくなつて、猿と蛙は、まず餅搗ぎどこさ行つて、

「貴様、裏口から入つて、長者さまには一人孫いたな、そいつくらいめんごいのないから、井戸さ入つて、赤子の泣き真似しろ。そうすつじど、確かに、餅搗けたとき、俺あ、臼がらみ背負つて来つから、小屋あたりに隠つていて…」

と、二人で相談して、蛙は裏口から入つ

て人に見つけらんねようにして、隠つていで、

「今度あ、餅あ搗けた搗けた、まずこんどは食うばりだ」

なんていう音すつどき、井戸の中さ入つて、ああというもんで、啼いたど。すつど、

「これは、孫は井戸さ入ったからだ。何にもかまねで助けて呉くろ」

と言うことで、餅搗きやめて、井戸かいたところあ、蛙あ目キロキロと光まなぐらして、石さたぐり着いたど。

「これあ、この蛙に相違ないから、ぶち殺せ」

と言うもんで、若衆は殺そうとすつど、
「蛙は人の真似するのあ、憑られつど悪
れから、殺さねで呉ろよ」

と言うことで、やつぱし土さ上さはだ
がつで、氣絶したりして、やつと生きて
山さ行つたところあ、こんどあ、猿は白
背負つて、山さ行つてたど。

そうすつじど、分けて食つたらええが
んべと、蛙あ言うたらば、

「いや、俺あ重たい思ひして背負つて来
たもの、分けてなの食んね」
と。

「いや、俺も死にめに会つて来たもの、
分けたらええがんべ」

「いや、こいつあ、転ばして早く餅とつ
た人は勝た」

と言うもんであ、白転ばして、猿あ
白に負けないで走つて行つたところあ、
さっぱり白の中に餅はないど。そうした
ところあ、蛙は、

「俺は、なえでも分んねげんども、俺も行
んかな」

と思つて、ビダリビダリと行つたところあ、ツツギの株の上さ、ちゃんと餅あ
がつてホヤホヤホヤとしていて、これは
天の恵みだと思つて、その上さあがつて
いたところあ、白の餅のひつついだの、
なの食つて、まず猿あ登つて来たのを

見っだ。

「蛙、あんどき分けさえもすつどええがったげんども、俺あ欲深くて悪いがったから、どうか半分分けて呉ろ」

「いや、あれほと言ったな、分けて呉れらんね」

「それで、慾張りで俺ばり食っていらんねがら、ほんじゃ、尻出せ」

と、熱いどこビダーツとぶつつけて呉たところあ、猿あ、

「熱い熱い」

と言うもんで、ひっぱって食ってるうちに赤むくれになった。それをまた食だくって、

「まいと呉ろ」

と。そしたところが、

「顔出せ」

そして顔を出したかと思うと、また熱い餅ぶつつけてもらって、猿の尻は赤むくれ、顔も赤むくれ、んだからみんなで分けて食んなねと。

かわうそと狐

かわうそは雑魚とり上手で、折々雑魚さげて来て、そうすつど狐はそこで見てる。そして串さ刺してあぶって、匂いすつど、とにかく食だく下つて来て、

「かわうそ殿、かわうそ殿、おれに御馳走して呉^くろ」

と。

「ほんじゃ、御馳走すんなねべな」

いや、とにかく美味いもんだから、狐は、

「もつと呉^くろ」

「ほがえに、俺あ難儀してとつて来たのだから、そいつは雑作ないごんだから、教えてやつから、とつてこい」

と。そうすつじど、狐、

「なじよしてとるもんだ」

「それなあ、感じた夜（寒くて肌^{すが}に感じる夜）、川さ行ってみつど、氷張^{すが}つてい

る。その氷の中さ尻尾を入つでやつど、重たいほどこかる」

と教えらつで、雑作ないごんだと思つて、小便たれで穴あけて、そこさ尻尾を入つでいたところあ、ミリミリミリミリという音するんだし、きつくミリミリとなつて、

「なんぼか掛つたもんだべ」

と喜こんで、そのうちに明るくなるようなものだから、引っぱつて取んべと思つたら、なかなかその尻尾はとれない。キヤーキヤー、コンコンという音するようだなと、近所で聞いただど。そんでまづ明るくなったから、一生懸命で引つ

ぱったげんども、もげるたつて、まず尻尾は引っぱらんね訳だ。

そのうちに、みんな来て、狐ば叩いたり、こずいたりして獲らつてしまつたけどはあ。んだから狐だつて、かわうそにあんまり易いことしたり、自分が人のものばり食う氣にあ、ならんねもんだど。

文 福 茶 釜

狐が、ある旅人の前さ来て、
「どうか助けて呉ろ、獲られつどこだから」

と言うたど。そうすつど、旅人は、

「狐、何とかお前化けて、風呂敷さでも入つて、背負いでもしなければ、俺、助けらんね」

と。風呂敷の中さ小さくなつて、その風呂敷背負つて歩いてゐるうちに、

「狐あ来なかつたか」

「来なかつた」

と。そして今度は人のいないところさ行つて、

「ここらでまず人に見付けらんねように行げ」

と。そうしたところあ、助けらつた恩返しに、俺あ何とかすんなねど。

「俺、あるとこのお寺で、和尚、茶釜ほ

しいという話聞いた。そこさ、俺どこ、茶釜に化けっから、それ売つて呉ろ」

と言わつて、その茶釜の恰好に化けたそうだ。

「ほう、上手に化けたな。首はいま少し太っどええなあ」

「ツルはもう少し太いとええなあ」

と。とってもええ恰好に化けらせて背負つて行つたど。そうすつじど、お寺さ行つたところあ、

「いや、氣にいった茶釜だほに、んじゃ買うべ」

「なんぼでないと、分んねな。高いな」

「お前、めつたにこんがえ恰好のええな

ざあないもんだ」

と。そしてその茶釜を、まず早くお茶でも出してみろ、小僧、火焚いてお湯沸かせ、とプンプンプンプンと。

「なえだて、プンプンと、早くすすけたから、研いで来い」

と。流しさやらつた。流しさ行つて小僧はまず灰をつけて研いだど。

「そつと研げ小僧小僧。痛いからそつと研げ小僧小僧」

なんて言うこんだど、その茶釜は。

「いや、和尚さま、とんな音立てる茶釜だ」

「そんげなことないんだから、まず早く

お茶出して飲ませろ」

と言わつて、火き釜かけたところが、またプンプンと。

和尚さまと小僧は魂消ていたうちに
はあ、尻尾出す、足出すではあ、その
茶釜は逃げて行つたど。

おりや峠

越後さ行くとき、先には峠越して行か
んなねがつたど。警女こぜなども峠越えて来
たもんだどなつし。(尼様など、ええどこ
ほど出したつたどなし。世の中見せるた
めに。その後でないど、嫁にやんねがつ

たどなし。所風きようふうでな)

そんな時、峠越えて来んなね。目の見
えない人が峠さ引つ掛つたとき、これか
ら行くよりは、ここで一晚泊きふつかはあ
なあ。目は見えねもんだから寂さびしえも何
もないんだし、そして三味線たが持つて、そ
いつをひいて唄うたつていたところあ、

「いや、上手だ」

なんていう者は来て、

「まいと聞かせろ」

と言う者あ来たど。その話の土台は、
夫婦で山さ巢くつて、亭主はいろいろな
ものとして食つたり、鉄砲で励んでいた
ど。そうすつど、そのオカタどこさ、い

つでも、暮、味噌漬にして、夫は弁当のお菜に、自分ばかり食っていつこんだどな。こいつ女ざあ食うもんでない。食うもんでないの、見んな、なんて言うど、同じもんでな。それを夫の山さ出はって行つた後で、甕から出してみたらなんだか、鱗うろこなどあるもんだげんど、食つてみたら、とにかく美味いもので、うまくてうまくてはあ、その味噌漬みそ漬たんと食つたどはあ。そしたば水飲みたくて水飲みたくて仕様がな

川さ行つて、曲まがつて飲み、こんどはそんでも喉乾くから、山から降りて行つて川さ喉つき出して飲むべと思つたら、

われ体は蛇になつてだど。

「いや、とにかくこの人間でなくなつたから、ここで住んでる他ない」

と言つていだったそうだ。

「この山に住んでたオリヤという蛇だ。俺はとにかく、人の往来も激しくなつたじ、するから、この山に住んでいらんねくなんべから、まず越後を泥の海にする計画しつた」

と、こつういふごんだけど。その盲の坊さまさ。

そうすつど、

「このこと行つて語つこんだらば、お前の生命はないぞ」

と言わっただげんども、語んねど…。

その時、蛇は何一番好きだ嫌いだの話で、

「俺あ鉄くらい嫌いなものない」

と、オリヤが言ったそうさ。坊さまはそいつを教えたところが、そっちこっちの鍛冶屋さ頼んで鉄の棒いっぱい拵えて、その山さ皆杭みたいに打ったど。そうすつど七日七晩うなり声したと。

そうしてその死んだお坊さんを神に祀って、その鉄の棒を神さまのぐるりや、中さ置いておいたど。

狐むかし

(一)

晦日と盆ばりだったんだなつし。先には「通い」というもんで、いさばかまわず魚屋でも酒屋でも払うのは…。

そんな時に、荒砥に二軒ばりしか魚屋なくて、その仲町に魚屋から買つて来て、払うじど、酒御馳走になつて、正月買物してくるもんだから、のんべに助けんかねがつたど。ヤンヤンと助けに四五人で行ったもんだどな。そうすつじど、背負つて来た荷物背中から降ろして、

「俺あ、払って来たの、余計なものなど持^たって行け」

なんて、ヤンヤンと言つてつかつたど。そうすつど、狐ははぐつたり、持つたりしたど。そして喧嘩したもんだつたど。そして氣イつてから帰さんなねがつたど。

(二)

やっぱし、晩方など、何か持つてなど歩くと、狐に騙さつて、持つて行つて見つじど、何も入つてね。何処さ落として来たんだかと、のんべに言わんなねがつた

ど。そうすつじど、夜になつたたて、提灯など点けて歩かんねがつたど。何かツウツウと草ぶくさ喰付くような氣持すつかつたもんだど。提灯持^たくじど……。狐がクエンクエンと提灯を上げんのだど。そうすつじど、提灯が手から落ちて転ぶがつたど。そしてまた灯つけて、何処だべと思つて見ると、提灯のローソクさあ、無くなつてゐるもんだけど。何とも仕樣ないから、狐退治さんなねと、みんな集まつて、狐というものは、油は好きだ。油をいっぱい、そちこちさ匂いさせておらだ大勢だもの、狐ぐらい、なじよかされんべ。

ある時、みんなで火焚いていたそうだと。

そしたところが、どこからなんだか、墨染めの衣着て、錫杖ついで、お寺さま来て、

「何だ、お前方、何したとこだ」

そうしたところ、

「とにかく、困ったもんだ。狐に騙さつて、おらだ狐退治さんなねと思つていたところだ」

「俺は決して殺生ぎあするもんでないぞ。俺あそつちこつちさ、そういう風に廻つて、狐さなど話語つて教えつど、狐あ出なくなるもんだから、俺あ引受けつから、お前ら帰れ、お前だいるじど、狐あ来ね

がら…」

と言わつて、

「何なんだか、お和尚さま、何さつていだもんだか、まず」

なんて、朝げ行つてみたところあ、狐の大きい、なんぼ古いのなんだか、みな油舐めて油に酔えて寝て、死んだようになつていだつけど。それを殺して、村中かつねで、足と手つないで、みな狐見せしたつたど。狐も人になわねくて…。

股 大 根

（秋行というものは、春から秋までつとめて働いて、秋にとり入れしているうちに、着物でも何でも切れるもんだ。そうすつじど、着物を一杯洗って持つて行つて、まずとれた米を、マメで働いたということで先の親さも報告して、進ぜて、その時洗濯でも何でもして来てよいということ、長く泊つたもんだ）お大黒さまとお恵比須さまざあ、兄弟でござつて、一番と総領がお大黒さまで、何か国に悶着があつて、大國主命となつたのはそれからだといふこんだど。

大國主命は餅のうんと好きな神さまだつたど。そして富士山を寄せと外国に言わつて、確か何かあるべとて、ある国さ行く時、一番の総領をやつて、途中にして、大根洗いしていた女いたつたど。大根というのは、毒消しだから、貰いたいと思つて、

「大根一本呉れてくろ」

と言つたところが、

「いや、俺あ何本と渡さつた大根だほでに、あげる訳にはいかない」

と。情けないもんだなあと思つて、その着物こっばな木葉こっばのようだと言ふことあんだ、それに、女は乱れのない着物きて大

根洗いしったというごんだ。そんでも貴婦人で、とても重々しいところあった女であつたそうだ。

それからよほど行つたところが、おおと呼ぶるもんだから、後ろを見たところが、

「股大根になつたの、一本が一本、ここ割つたたて、やつぱり一本だ。んだから一本割つてきたから、差し上げる」

と言わつて、有難く持つて行つたら、

案の定餅をいっぱい出さつた。その餅を大根を食つては食い、そしてこのいっばいの餅食ねと分んねと言わつて、大根おや噛りかじり餅を大根でこなして談判を終

して来たど。

家さ歸つて話したら、何ごとも望み通りにさせるといふから、俺は一番大きなお宮を欲しいと、そしてそのオカタといふものは、俺がこゝした訳で助けらつじやんだから、その女を欲しいと。そして堅く勤めつたつたもんだど。そして、出雲大社を一番目のがもらつて、二番目のは京都のお宮を建ててもらつて別れたんだど。

んだから、その會議には一番大きいお宮さ、その神さまだは、十月二十九日（刈上げ餅の日）の餅を「神上げ餅」と言うたもんだど。また神さまが會議に出雲大

猿 蟹 合 戦

社にござる、その月を「神無月」というもんだど。お大黒さまは釣好きでござつて、自分の作ったもんで、うんと蓄えのええ神さまだから、お大黒さまとお恵比須さまは兄弟仲よくして、とてもええオカタで、助け合いで、仕合せに送ったどし。んだから、身成りや何や、考えねったてええから、オカタのしつかりなの持たねくてなんねど。

（十月二十九日は海も荒れて、竜宮からも三宝に竜の恰好しつたのを、お供えに上がるもんだけど。そいつが上がりさえもすつど荒れたのが静まるもんだつたど）

毎日毎日の雨降りで、何とも石は流つたりなんかえして、腹減つたげんども、蟹はいらんねくて、石の陰さピターツとひつついて、水の少なくなるまで待ちていたうちに、お天道さまも出来やつて水の音もコツコツコツと、ええ塩梅になったから、流されるなんていうこと案ずつこともなかんべとて、石の上さあがつていたところ、何だか握り飯みたいなもの見えるもんだから、

「あそこまで行ってみつか」

なんて、何落っただんだかなと思って、

人に見付けらんねように、道の草ぶく、横這いに這って行ってみたところあ、大きな握り飯落ちたど。これは仕合せな、これはよかつたと思つて、人に見つけらんねように、モクモクとして、握り飯食つて、

「俺は、こいつみな食^かんねから、今度仕舞つてで腹減つたとき食うべ」

と思つて、背中さ上げて、ずうつと家さ来て、戸棚の中さ入れてたところあ、猿あ来たずうもんで、山で見てて、蟹は握り飯拾つたのを見てて、

「俺も食つて呉^くらんね」

と、途中で柿の種子拾つたど。その柿

の種子持^たつて、

「何とした。蟹どの」

と言つたところが、

「いやいや、ひどかつたな。この雨では。

腹減つて仕様なくて、やつと今日まず腹くちくしたところだ」

「俺あ山で見つた。あんだばり腹くちくしていらんねんだから、俺と分けて食ねが」

と。

「俺あ難儀して持つて来たのだ。この次に腹減つたとき食うのなもの、呉^けらんねこで」

「俺は、唯呉ろというのでない。柿の種

子もつて来たからとりかえろ。この柿の種子は一生懸命で実らせさえすつど、毎年食れるもんだ。んだから取換えろ」

と、騙して戸棚から出して、猿あ喜んでみな食つて行つたど。そして今度あ、毎日毎日、

芽出さねど缺切る

ならざら缺切る

と、となえているうち、秋あ来て実つたど。そうすつじど、食いたいげんども、挽ぐことは出来なくて、熟して落ちたとき食うべと思つて、毎日下から見つたど。そうすつじど、また猿あ、

「今度は美しくなつた。あいつまた俺あ

食つて呉れんなね」

と、山から見て来て、

「実らせたね」

「やつと実つた」

「ほんじゃ、もがれつか」

「ええ、落ちるまで待つてでいつから、
もいでもらわねつたて、ええ」

と言うげんども、猿だから、ワラワラと木さあがつて、自分ばり美味いところ、うまいとこと、自分ばり食つて、そして、
「なえだ、まず。俺あ実らせたなだもの、
そがえに自分ばり食んねごで」

「いや、俺あ柿の種子と取換えたからこそ、実がみのつたのだ。俺のだから」

と、木の上さあがって、それ食いたい
ごんだらば、と言うもんで、鼻糞くつつ
けたり、尻さ当てたりして、蟹どこさぶつ
つけたりして、ええのなど寄越さねがっ
たど。そして、蟹あ焼いて、

「猿あ尻あ赤まっか」

なんて言うたらば、ごしやえで、いっ
ばいふところさ入っだ柿、毎日毎日食い
に来て、持つて行く勘定したの、ごしや
えで逆さに降りて来たところあ、みんな
落ちたの、ワラワラと拾って、蟹は隠っ
だごんだど。

「よしよし、まず晩に、仇とりに来っか
ら、そっけなもの、じきに吹っ飛ばして、

ひつつぶして呉れっから……」

と言うもんで、猿あ行っただど。

そうすっど、柿食ったええげんど、恐っ
かなくなつて泣いっただど。そうしたとこ
ろあ、こんど、アチャコモ・カチャコモ
という音するので、何だかと思つたら、
針が来て、

「なんとして泣いっでらっただど」

「こうこういう訳で、晩げ俺あ殺されっ
どこだ」

そうしたところあ、コロコロコロコロ
というもの来たから、何あ来たと思うと、
栗など来たので、その話をした。そうすっ
ど、ブンブンブンというの来た。蜂など

来たど。そんなでもそんがえなもののばり
寄つてみたつて、あの猿にはとうてい敵
わね。な・じ・よ・し・た・つ・た・て・分・か・る・も・ん・で・な
いからと、また泣いていたど。ドダエン・
ドダエンと何か恐つかないもの来たかと
思つたれば、臼など来たど。

「なんと泣いっだ」

「こういう話だ」

「あんな猿など、一打ちにしてくれつか
ら、心配すんな」

と。昆布なの、ペタリペタリと来て、
「蟹は縁の下の石の下さ隠つでいろ。そ
れそれに猿あ来て、火ほげんべがら、そ
んときに灰あく持つて目さ入れっから」

と栗。蜂は、

「目洗いに来んべから、俺あ刺す」

針は、

「寝床さ来んべがら、俺あ刺す」

「たしか帰つて行くととき、足引っぱつて
くれる」

と昆布は言う。そして今度は、

「俺は仇討つてつぶしてくれる」

と曰は言うもんで、みんなそこで話合
いして、て・ん・で・に・別・れ・て、そこそこにい
たど。そしたところあ、

「なんとした。仇討つて呉れんぞ」

と言う声するもんだから、な・ん・ぼ・石の
下さ居たつたて、恐つかなくて、ピッタ

リしていたそうだと。そしたば、やつぱり、

「暗くて分かんねから、火焚くより他ない」

なんて、火ほげたところが、灰持つて

栗はボーツンと目をめがけて投つたど。

そうすつど、

「熱い熱い、まずまず、入り水さ行つて、

目洗つて来んなね」

と思つて行つたところあ、蜂に刺され

る。

「いやいや、何者を頼んでいたもんだか、

こりや寝んなねまず。明日の朝げだ、ま

ず」

と、寝床さ行つたところあ、針はツク

ツクと刺して、とにかく居らんね。

「ほんじゃ、明日、出直して来る」

ほして、出てきたところあ、戸の口開

けたら、昆布あ足ツルンと滑めらかした

ところさ、臼はドダエンと落ちて来て、

つぶしたど。

あんまりずる賢いことしたから、み

んな堅い真面目な者さだと、加勢して

呉つけんども、猿みたいなのは、分か

んねもんだ。

酒 呑 童 子

器量のええ男で、手紙なんというもの

は、読み書きもなんねほど入つて来っ

かつたてな。その男さよ。

ほんじゃ、俺あ此処にいたったて、こ
ういっぱい手紙なの来つから、俺は身か
くしてみんべと、丹波国の大江山とい
うとこさ行つて、そこの岩穴さ入つたと
こあ、そのうちに酒も飲みたいやら、何
もだから、その悪い者はみな集まつて、
夜はまず酒屋から酒、魚屋から魚、何で
もあらん限りなものを丹波国荒らして、
ええ女いるじど、その女を連れて来い、い
やどうだ、ずうもんで、朝げから晩げま
で酒飲みして、何とも仕様ないから、今
度は鬼の面かぶつてみんなと思つてみた
ら、心は邪険で顔ばりきれいな男だつた

から、その鬼の面がとらんぬぐなつて、
丹波国、大江山さ入つた訳だつたど。

そうすつじど、そいつさ、稼ぎたくな
くて唯食つているような悪い者ばり、子
分が寄つた寄つた。青鬼・黒鬼・白鬼な
どみな寄つて行つたという話で、夜なの、
丹波国では灯など点けておかれるもん
でなかつたど。あそこにはええ娘いたな
んていうても、連れて行かれるやら、何と
も仕様ないがつたのが、天子様の耳さ
入つて、一番あらう頼光という者を呼
ばつて、

「あれを征伐しないじど、何とも仕様な
いから、何とかしろ」

と云うこといわつでなもんだから、一に頼光、二に渡辺、三に貞光、四に季武、五に宝生、六に金時。金時というのは、山姥が育てていたそうだから、それを貰いに行つて、五人では分んめえから、六人で、ということ、山姥から貰つて来たど。そしたら、

「俺は偉い人に進ぜだくつて育てつたの、ええ、ごんだから…」

と云うので、喜こんで貰つて来て、六人で何としたらええんだか、仲々賢くくて、仲々すごいもんだそうだから、敗けたなんていうんねから、何として行つたらええがんべと、山伏の姿にして、道に

迷つて大江山に入つたことにしたら一番よかんべと思つて、笈おいこしやえて、笈の中さヨロイ・カブト入れて、白装束になつて、山さ登つて行つたところが、やつぱし細道で誰も行かね山で、滝あるところで、此処で一休み休んで、それから發たつたらええがんべと、昼休みしたところが、白装束で頭の白いかぶつてやつて、白いヒョウタン持つて、

「お前だ、御苦労なごんだ。手ごわいもんだからよほど氣を付けないと…」

と、俺は山の神だ、氣をつけて、あれを征伐してもらいたいと言わつて目覚めたど。そうして、

「こういう夢見た。ヒヨウタンは鬼が飲むと弱くなるし、お前方飲むと強くなつから、小さいげんども、なんぼでも切りあなく酒が出つから…」

と言わつて見たら、そのヒヨウタンが頼光の頭の上にある。そしてそこにいた皆が同じ夢を見たもんだから、これはこれは、神さま、有難いというもんで、そこで、滝で垢離とつて、拝み申して山に登つて行つたど。すつど水は段々と赤くなる。

そしたば、ええお姫さまが、

「間違つて来たのに相違ないから、早く帰れ、帰れ」

と教えつこんだど。それでも、

「いや、苦勞しているお前方を助けるために来たのだから、お前こそ早く逃げろ、早く逃げろ」

と言うもんで、その女を逃がしたど。そしたば、

「人くさい、人くさい」

と言うて、

「また獲れたぞ、こりゃ」

なんていうような調子でいだけど。

「昨夜、女殺さつて、その着物洗つていんのだ」

と言つたど。それで頼光たちは門をどんどん叩いたところあ、

「俺だこうして道に間違つて来たところだから、泊めてくろ」

と言つたば、

「ええもの獲れた。あまりええ、泊れ」

と。そして今度は赤い顔面つらして、ぐるりさ子分置いて、大きな盃で酒飲んでいて、女をお酌とらせていたところさ行つて、

「俺だは酒を持つて来たほでに、おらだの酒も飲んでもらいたい」

「そんな小さいものから、この盃さ一杯になるもんでないべちやえ」

「いや、そうでない。魔法のヒョウタンだから、上がつて呉くろ」

と言うて、なんぼ注いでも注いでも無くなんねので、不思議だ。とても美味しい酒だ。こんな美味しい酒、よく持つて来たな。昨夜の肴出せなんて、人を切つたの、肴に出さつて、これは美味しいなんて言つたげんど、食う振りをして、みな見えないうようにして置いっだところが、

「貴様も飲め、貴様も飲め」

と言うもんで、子分さ飲ませたら、

「いや、美味しい、いや、美味しい」

そして、

「いや酔えた、酔えた」

なんて、自分も飲んで、頼光だは逆に強くなつたど。

片っ端から鬼はみな眠った。酒飲んで。酒呑童子はうまいうまいというもんで、飲ませて酔わせたところあ、それもそこさ転んで眠ってしまった。

「こんどは大丈夫だ」

と言うもんで、笈からヨロイ・カブトを皆出して、天皇から七枚カブトをもらって、頼光さまはそいつを着て、子分をみな切って、女衆を逃がして、大根・蕪を切るように、みな切って、一番おしまいに酒呑童子の首落としたところあ、

「騙さった、騙さった」

と言うもんで、ブウブウと、まず飛ばつで、なんとも困った。なんとかと、頼光

の頭ばりねらって、カブトの上さあがって、噛みついた。頼光さまはその重みで、ベダーツと腰折れになつてしまった。そこさ渡辺と金時など、やあやあと来て頼光のカブトを脱いでみたら、六枚に齒立ってた一枚だけ齒立っていねがつた。それで助かつた。それで天皇も喜んだ。

舌 切 雀

おじいさんとおばあさん、子ども持たないで、毎日毎日、二人で働いていたところが、あまりなつこい雀あ、じいさん

のところへ来て、チュウチュウと頭さ

登ったり、そりや、焼飯やきめした持つて行つたの

を呉れつじど、手の上で食つたりして、

仲々めんごい鳥だから、

「俺あ、子ども持たねがら、子どものようにして育ててみんべ」

と思つて、その雀をつれて来て、

「子どものように育てたらよかんべ、こりやめんごいなだ」

ずうもんで、ばあさんも、ほ・だ・な・なん

て…。

そして、おじいさんが働きに行く、おばあさんも働いていたど。その雀はことさらにおじいさんどこさなつて、おじ

いさんが籠の戸など開けたつて遊びに行つては入り、入りして、うんとめごくなつたそうだ。

ある時、おばあさんが機はたさ糊すんべと思つて、糊たくさんに拵えたところが、

おばあさんがいそがしくてもあつたんだべげんども、餌食ものせるの忘れていて、悪いげんども腹減つたからと、おばあさんが糊拵えたの、みな舐めたんだそうだ。おばあさんは、

「なんだ、誰も来ないのに。雀でないか、みなこ・だ・え・して舐めたの」

「許してお・く・や・い、腹減つたもんだから、みな糊舐めたとこだ」

「いや、許すということはゆかね。舌出べろせ」

と言うもんで、そして舌切って飛ばしてやったところあ、チュンチュンと啼きなきおじいさんが山さ行つてたときさ行つて、何だか気掛りで、

「俺の雀に似たらしいげんども、俺の雀であんまえ」

と思つて、少し早く帰つて、

「ばあさんばあさん、雀なんとした」

「あげな雀飼つていだつて、俺、糊しつたの舐めるようなものは飼つて置かんね。

舌切って飛ばしてやった」

「む・ご・さいことした。腹減つたがらだつ

たべ、そりや。いやいや、あれ、俺あ尋ねて来んなね、こりやまず」

と、一杯おにぎり握つてもらつて、山さ行つたところあ、途中で犬なの、ワンワンなんて、

「俺の舌切雀は知らねか」

「山の陰、陰」

というもんで、それからずうつと行つたらば、鳶が来た。

「トンビ殿、俺の舌切雀知らねか」

「あの山の陰だ」

なんて行つたところあ、こんどは野越え山越えで行つたら、また鳥さ出会つて、

「おらえの舌切雀、知らねか」

「あの竹林に、雀の家ある」

と言わっで、その竹林さ行つたところが、やつぱし、

「おじいさんだか、おばあさんだか」

「おじいさんだ」

と言うたば、

「いやいや、おじいさんがよく尋ねて来ておくやつた。おらえの雀は本当にごめんどうになり申して…」

と、とても待遇されて、山海の珍味でいつまで居たつても帰ることなどない。酒はうまい。おじいさんがほがらになつて、

ヒーサラ・ヒーサラ

あめよ
天地の宝を持つて来い

ヒーサラ

なんていう唄きいて、踊を見たり、自分が踊りをおどりして日暮ししているうちに、

「俺、行かんねえはなあ」

と言うたど。雀は、

「重い簞あええか、軽い簞あええか」

と言わっで、

「俺あ年寄りだから、軽い簞呉れてくる」と、軽い簞を背負せらつて帰つて来たところあ、

「何処さ行つて来た。そがえにいつまでも帰んねで…」

と言ったならば、

「こういう風なものもらつて来たごんだ。

雀から御馳走さつで…」

なんて開けてみたところあ、とにかく金銀珊瑚という、何でもかんでもある籠で、

「俺は俺で行つて来んなね、ほんじゃ」

と、おばあさんも一人でオニギリ握つて行つたところあ、犬あいたり、鳶あいたり、鳥あいたりして、聞いて行つたところあ、やっぱし竹林で、チャンキリ・チャンキリと機織りしつたど。そして、

「舌切雀だか」

と言つたところあ、

「おじいさんだか、おばあさんだか」

と。

「おばあさんだ」

と言つたげんども、まず、

「めんどろになつて…」

なんて、そこでも、おばあさんどこさ

なと御馳走したくなかつたべげんども、

御馳走したりして、

「重たい籠ええか、軽い籠ええか」

「俺は背負われつから、重い籠えええ」

ずうもんで、貰つて、

「途中で、決して開けないで呉ろ」

と言つたところが、見たくて見たくて、なんぼええものあつかと思つて、開けて

みたところあ、とんでもない物ばり入つていて、

これはこれは、おじいさんがああいう風にして親切にしたから、あがえなええもの貰つて来たべし、開けんなどいうの開けないで家さ行つて開けたれば、こげなもんでないがったと後悔して、ええばんさになつたど。

こぶとり

むかし、こぶのじいさんが山さ行つて、雨に降らつて、空洞^{がら}の木さ入つて、雨晴らすべど思っているうちに、夜になつた

もんだから、そこで夜明^{よあか}すべと思つたところあ、そこさいろいろな鬼がいっぱい来て、じんじやん騒ぎしているのを、そのおじいさんが歌も踊りも好きなもんだから、出はんねでいらんねくて、出はつたど。

そして踊りおどつたりしたところあ、大変にみんなに喜こばつて、そら酒飲め、そら何だと、こぶ喰付けつたの、また来る時、そのこぶとつてやつから、本当に来ることと言わつて、こぶとつてもらつた。そうすつじど、家さ帰つて来て、「いや、よかつた、よかつた。こういうことあつた」

猿むかし

と、隣のごぶじいさんとこさ、教えたところあ、そのじいさんもうらやましくて、行つたところが、木あつて、やつぱし空洞^{ほら}あつたど。そこさ入つていたところあ、また鬼どら来たど。

「まず、じいさんが出てくんべな」

と言うところさ、じいさん出はつて行つて、それでも下手で、とにかく歌も踊りも下手だつたど。

「なんだ、この間のじいさんと違つたから、ニセ者だから、このこぶをひつつけてやんなね」

と、両方さこぶ引つつけらつて、帰つて来たから、人真似してなんねという話。

茸、たと出てきてないもんだから、四方見たところが、この木で作つた小屋こみたいなところ見つけたど。そしてそこさ行つて見たところあ、猿の家だつたど。

「いやいや、とんだ猿の家だから、見付けらんねように、この上さあがつて、何しつたもんだか、見つだらええがんべ」

と。そうしたところは、隅の方さ、ぶどう酒造つてあるから、降りて来てぶどう酒飲んで、皆飲んで悪がんべから、少し残して小便たれで置いたど。そしてそいつかま[・]し[・]て[・]いたとこさ来て、猿あ

飲んだど。

猿の祝儀のこんだつたど。そしたらば、あつちからお仲人さま、こつちから赤い面さ、櫛の葉の衣裳など着て、そこさ入つて来たど。

「この酒、たとえ出来でなかつた」
なんて言うげんども、みな酒悪く酔えて眠てしまつたどこさ、ゆさゆさとして、皆殺して、

「こいつ、みな売つたら、茸よりたんとええ錢になる」

というもんで、そいつを、

「血の薬、血の薬」

というもんで、西山から持つてきて、

猿なんざ見たことないもんだから、

「猿売りあ来た」

と言うもんで、たちまち売つて、大変面白いがつたという話。

貉むじな
むかし

山さ狩になど行つたとき、夜など帰らんねぐなつて泊まつたりなんかした時は、灯あかしを頼たよつて行つてみつど、何かにかいるもんだ。

そして灯頼よつて行つたところあ、年寄りばさま。確かこれは何かものに相違ない山さ一人でこうしているなんという

ことはと、ばさまさ鉄砲ぶったげんど、平気で仕事してるつて。ほんじゃらば、灯さ打つてみたら、ええがんべと思つて、灯さぶつつけたところが、ギヤーツという。

朝げに起きてみれば、大きな貉なもんだけど。

猿 聲

裏千刈、前千刈持った長者だげんども、日でりで、いっこう実入んねもんだから、毎日毎朝、旦那さまが、

「裏千刈、前千刈、困ったな。こいつさ

えも掛けて呉れんなら、俺は三人の娘持ったうち、一人娘呉れっけんどなあ」

と、煙草喫んで腰かけて話語ったところあ、何処となくから、こそそこそこそと来たものある。そしたらば、猿あ来たど。

「いま何語った」

「何も語んね」

猿なもんだから言うた。

「何語んねなんつあない。聞いただ」

と。そいつ語んねでもいらんねくて語ったところが、

「はあ、ほんじや、俺、水掛けんのなど雑作ない。ほんじや、本当に呉れんなね

ぞ」

と言わつて帰つて来たどだと。そう
したところあ、夕方から雲は下つて、ど
んどんという雨降りになつて、裏千刈・
前千刈、たつぷりと水掛かつた。そして
こんど子どもらは、まず喜んで、

「おとつあま、水あ掛かつた。なして
起きやんね、早く起きやい。水はたつぷ
り掛かつたし、早く起きて飯あがれ」
まま

そんでも娘呉らんねなこと嘘語つたも
んだから、いらんねもんだし、水掛ける
くらいな猿なもんだから、何しないざあ
ない。こんどは娘さ承諾させることはで
きないし、心配して起きないでいたら、

一人の娘が早く起きて飯あ上がれと来た
げんど、

「俺は飯食^かんね」

「なして食んね」

と聞いたれば、

「俺は猿さ、こうこうした訳で、持った
娘一人呉れるというところ、水掛け
てくれたの、あれさ嘘語つていらんねか
ら、猿のオカタになつて呉れぬか」

と言つた。

「人間が猿のオカタになつていらんねな。
何もんぼつじや」

と言うもんで、おどつあまどこから
悪態しながら立つて行つた。そうして二

番目の娘が来たらば、その話して、

「いかにもんぼっじやだて、なんぼ畜生に水掛けてもらつて、畜生のオカタになつていらんね」

と言うもんで、たったもう一人の娘なもんだ。なんとしたらええがんべと、ますす心配して寝つだどこさ、三人目の娘あ来て、

「おどつつあま、飯あがやい」

「俺ごと聞いて呉れないか」

「おどつつあまのことなど、何でも聞くから、早く起きて飯あがれ、水のかかつたどこ見せ申したいから…」

と。そうすつど、おどつつあまはこう

こうした訳で、水掛けてもらったのだと言つたど。

「そがえ、猿のオカタになるなんて、いとやすいごんだ。まず、おどつつあま見て飯あがつておくやい」

なんて言わつて、喜んで飯食つたど。

そうすつど、猿は籠さなどのつて来たど。いよいよ行かんねくて、まず嫁にやつたそうだ。行くとき、沼さ梅の木がたれ下がつていた。そいつを眺めて行つたど。そして今度、三月節句に、

「おらほでは、節句に、おどつつあまどさ餅持つて行く」

「ほんじや、餅持つて行かんねごで…」

そして、

「何さ持つて行つたらええべな」

「おらえのおどつつあま、そんげな櫛の葉さ持つて行くと、櫛の葉くさいとあがんね」

「臼がらみ背負つて行つてあげたい」

「ほんじゃ、臼がらみ、雑作なく背負われる」

そうしたところあ、来つどき花ええ塩梅に咲いっただ。そうすつど、

「あらあ、あの花、おどつつあまに上げたらば、なんぼ喜んで見やんだか。あの花折つて行つて見せ申したいなあ」

と言つたば、猿は、

「あがえな木折つて行くの雑作ない。折つて来て呉る」

と、臼置いて登る勘定した。

「そうすつど、土臭いと、おどつつあま言いやるで、その臼背負つて登つてもらわねじど、進ぜらんね」

と。猿のもんだから、

「ここらか」

「いや、もう少しそつちの方は枝ぶりはええ」

「ここらか」

と言つと、

「いま少し天井の方だと枝ぶりはええ」
そうしているうちに、臼がらみしたも

んだから、ポキンと枝折つで、沼の中さ入って、死んでしまったど。

わらわらと、

「こうして来た、姉さだ。何としつた」

と来たところあ、お天道さまの罰当つて、お天道さまに親不孝したほで、体を見せらんねぐさつではあ、モグラモチになつて、土の中さ入って行つたごんだという話。

んだから、親孝行さあ、百行のもとで、親不孝しないで、親のこと聞きさえもすつじど、何かでええことある。

菖 蒲 湯

娘のきれいなさ、ええ男が每晚入つて来て、その身体なりの冷たいことは、恐ろしいような冷たぶりだど。そう親さ語つたところあ、

「ほんじや、これは不思議なもんだ」

と。そしたところが、そんでは衣裳の裾に針を刺させたところ、そして糸を辿って行つたところあ、蛇穴さ入って行つたど。何か音すつど思つたところあ、
「ああ、苦しい苦しい。俺は分んね。ほんでも俺あ子ども入つて来たからええ」
「分んねこで、人間なんざあ、賢こくて、

じきに子どもなど墮おとす。菖蒲とモグサさえお湯さ入つてその湯さ入れば、みな墮おちるもんだ。んだから、人間さざあ、悪いことさんねんだぞ」

という教えことだったぞ。そいつ聞いて来て、まず湯立てて入らせたところあ、蛇子はみなぞろぞろと出はつたぞ。んだから、五月の節句には、そのお湯立てて、入れるんだぞ。そしてぐるりさ鬼は来ねように、菖蒲とモグサさすのだった。

食わず女房

欲のふかくて、飯食わせるにもおしいような男이었다。そうすつじど、そこさ夕方泊めて呉くろと、ええ女来たぞ。「泊つてあまりええ、おらえではたんと飯などいらねほでに、飯食ねから、そうは米などないぞ」

「飯など食ねつたてええから泊めて呉くろ」

と、泊つたところは、いつまでもその女はいたぞ。そしてそんでも米櫃はガラガラ減つこんだずもなあ。男のばり炊かいて食せんのに、いつでも米箱は減つて

いっこんだ。奇態なもんだと思つて、ある時、稼ぎに行つた振りして、窓を越して見たそうだ。そうしたところあ、中からとんでもない髪ダザランと下げて、どんどんと頭の上から入つてやるのだけずも、御飯おまば。恐ろしくて恐ろしくて、

「鬼・ずうもんだか、化物・ずうもんだか、こがえな者か」

と思つて、今度は、そいつに見つけらんねように、逃げたそうだ。そうしたところあ、その化物になつて姿現あらわして、追かけらつじやど。そうすつど、何とも仕様なくて、菖蒲とモグサと、ひたひたというようなどこさ、隠かくつたところが、

ここにいた、ここにいたと思つげんども、ぐるりんぐるりんと廻まわつたげんども、菖蒲とモグサでその者は探たねらんねでしまつたど。魔物は来らんねように菖蒲とモグサを軒のきさ刺さすんだど。

二 十 四 孝

あるところに、親孝行の子どもはいて、親病氣して、何にも食たいたいものなくて、段々弱るほでに、

「何とかして、こりや、マメにしたいもんだ」

と思つて心配して、親に、

「なに一番食いたくないげんども、筍食いたい。冬だから筍などないべげんども、それ食つてみたい」

と言わつて、

「ほんじゃ、竹林さ行つて掘つてみたら
ば、筍ないこともないべ」

と、冬、雪踏みふみ、鍬たがつて竹林
さ行つてみたところが、まず幸に筍は雪
の中からヒヨイヒヨイヒヨイとできたど。

そうすつじど、これは天の与えだとい
うもんで、喜んで冷たいも忘つて、掘つ
て来て、親に上げたところが、親は喜ん
でそれ食べてから、今度はええくなつて、
長生きしやつたど。

養 老 の 滝

あるところに、親孝行な子どもはいて、
そいつの家は貧しくて、酒好きな親だけ
ども、酒も上げらんねようだげんども、
何とかしてこの親に酒を進ぜたいもんだ
と思つて、毎日山さ行つて柴刈りしては、
町さ下がつて、その金で酒買つて来て、
親父に上げつじど、その親は喜んで、

「いや、これは美味い」

と、にこにこと飲むと、この姿見たく
て、先ず毎日ヒヨウタンさげて山さ行つ
て帰りにやその金で酒屋は寄つて酒買つ
て来て進ぜたもんだど。

ある時、水飲みたくて滝あつどき行つて、飲んでみたところあ、酒だごんだじもな。そうすつじど、

「これは酒のようだ。もう一口飲んでみんべ」

と思つてみつど、やつぱり酒だど。そいつをヒョウタンさつめて、

「俺は酒だと思うげんども、親は飲んでみつじどどうだか」

と思つて、まずヒョウタンさ、たつぷりもつ来て、進ぜたらば、

「いやいや、美味しい酒だ。これは飲んだことのない美味しい酒だ。甘露甘露」

と言つて上がったど。そうすつじど、

また毎日毎日滝から汲んで行くと、

「本當にうまい、うまい」

と上がつかつたど。

その話は隣から隣、村から村と伝わつて来て、

「それはええことだから、おらも樽でも持つて行つて、いっぱい詰めて来んべ」

と、どんどんと人は滝さ行つて、水を汲んで家さ来てみつじど、唯の水で、酒でないごんだずも。その親孝行な子どもが行つて飲んでみつじど、酒だ。そいつは神さま、親孝行なもんだから、神さまが酒を下さつたのだつたど。んだから、親孝行というものは、神さまでも何でも

見ておくやるから、親孝行しなくてはならんねえ。

瓜姫子と天邪鬼

おじいさんとおばあさんが、子ども持たねくて一生懸命で働いて、瓜をいっぱい蒔いて、ばば瓜熟んだ頃だと思つて、ばあさんがハケゴ背負つて来たところが、めんこい子どもは、瓜畑ぐるんぐるんと走つて廻る。

「こらこら、お前だ、瓜はそういう風に
して上がつじど、蔓はわかんなくなるか
ら、あがんよ」

と、こう言うても聞かないで騒ぐど。
何とも仕様ないから、瓜見に行ったところあ、ばば瓜は二つに割つて、そこから出来た子どもだど。んだもんだから、そいつをハケゴさ入つて、

「おじいさん、おらだ子ども持たないがために、こりや、授けておくやつたべから、これをおがしてゝ、何と名付けたらええがんべ」

「瓜からできたから、瓜姫子と名付けたらええがんべ」

と、その子どもを瓜姫子と名付けて、

「何好きだ」

と、小豆飯とじさ魚かけてか、なんて言う

もんだから、魚買つて来て食^かせたらば、

ずんずんおがつて機織り好きな子どもで、
おばあさんが機^は教えたところが、機織り、
とうししていた。またトコロ好きでも

あつたど。んだから、

「トコロ掘つて呉れっから、まず天邪鬼
というだつてえ者来っから、天邪鬼にこ
この戸ばり開けんよ」

と言わつて、そして、

「行つてござえ」

なんて戸を閉めていたところあ、やつ
ばし天邪鬼は来て、

「瓜姫子、なんぼ機織った」

「少ししか織んね」

「少し開けてみせろ」

「いやいや、これはじいさん、ばあさん
に開けてみせんなよと言わつたもんだか
ら、開けらんね」

「ほんじゃ、俺はこの戸破つて入つて
行くぞ」

と、こう言わつたもんだから、瓜姫子
は仕方なく少し開けた。今度は手入るく
らい……。いや顔入るくらい……。と言わつ
て、少しずつ開けたところあ、ぐいっと
開けて来て、瓜姫子を殺して、瓜姫子の
着物をきて、瓜姫子になつて、機織りしつ
たところあ、じいさんばあさんが山から
帰つて来て、足洗つていたときさ、きれ

いな鳥が裏の方から飛んで来て、

瓜姫子ののり機はたさ

天邪鬼あぶちのつて

ギーゴ・パテン

なんて、三度も言つて、不思議な
んだと思つて、何もなかったかなと、家
さ入つてわらわらと、トコロを煮て食せ
たところ、いつでも瓜姫子は柔しい言葉
掛けつけんども、今日はそげなこともな
い。煮たから食くえと言つたところあ、瓜
姫子はうまいごんだの、こうだのと話し
かけながら、食うなだげんども、今日は
ガリガリガリと毛も皮もむかないで皆食
う。不思議なごんだな。

「毛ばりむいて食うんだ」

と言つたところが、

毛あ毛の薬

皮あ皮の薬

と言ふもんで、今度は瓜姫子でなく
なつて天邪鬼になつて逃げて行つたど。
そうすつど、あれは後の方から来たのは、
瓜姫子だべと思つて行つてみたところあ、
裸にさつて、血まみれになつて、カヤさ
丸まつて殺さつていだど。んだから、今
もつて、瓜姫子の血で、カヤの穂の下は
赤くなつてゐる。

糠福と米福

糠福と米福という二人の姉妹はいて、糠福は先妻の子どもで、米福は後のおっかさんの子であつたど。

そのおっかさんが米福の方ばりめんごく、糠福の方、めんごくなくて、毎日毎日姉の方を働かせて、髪も結わせないようなこととして働かせて、われあ子どもと言うじど、美味しいもの食せて、ええ着物きせていたつたそうだ。ある時、

「山さ栗拾いに行つて来い」

と言つて、姉の方さ底など皆切れつたのあずけて、われあ子どもさと言うじど、

ええなあずけて、二人さ、ヤキメシ握つてあずけてやつたそうだ。そして姉の方はなんぼ拾つても、みな底から落ちでつて、溜んねくて、米福の方さと言うじど、いっぱいになつたから、

「姉さん、帰つたらええでないか」

と。

「いや、おれあまだ溜んねがら、こいつさ溜めて行かねじど、追出さ^{ほだ}れつし、飯も食せらんねから、ここに沼あつから、まず飯食つたらええがんべ」

と、二人で腰かけて握り飯出してみたところが、姉の方のは、とにかく糠ばりで食んね。妹の方というと、美味しいのだつ

たど。

「ほんじゃ、二人で分けて食うべ」

と、妹の分けて食って、その沼さ糠福の方が握り飯を投げたところあ、浮きて沈まねようなもんだったど。

「お前はいっぱい拾ったんだし、おつかさ・帰んねじど、心配するから、お前ばり帰れ、おればり拾って行んから…」

と、こう言つて、妹を帰して、

「いやいや、おれは家さ行くじど、はあ、^{ぼだ}追出されんだし、死んだらええんだか」

と、沼を眺めていたところあ、モクモクと沼はいうから、見っだうちに、大きな蛇あ出はつて来たど。

「恐つかない」

と言うたところあ、

「いや、恐つかないではない。おれはお前のおつかさだっただげんども、蛇に生れ返つてこの主になつていたどこだ。んだから、お前にそういう風に苦しめたところ聞いっだ。何ともこの姿では仕方ないから、下界にも行かんねんだし、お前にええ・打出の小槌をくれるから、これを振つて、お前の好きなもの出せはええし、何でも思うことはできつから、打出の小槌を叩け」

と。そしてもらつて、今度はハケゴの底のあるの出してもらつて、いっぱいに

栗入つて帰つて来たど。

お祭りは近づいて、妹は着物でも縫つてもらつて、その祭りの日、おつかさとお祭りに出きたど。お母さは糠福に、
「お祭りに行つて来つから、糠福は米搗いておけよ」

と言わつて、

「はい」

と聞いて、米搗いていたところさ、友達か、

「お祭り見に行かないか」

「おれは米搗きしんなねくて行かんね」

「おれ搗いて助けるから、あえべ」

と言わつて、その打出の小槌で着物か

ら下駄まで出してもらつて、みんな髪なの結つて呉て、

「早く帰つて来て、飯炊いて居つどええのだから、おつかさに見つけらんねように行つたら、ええがんべ」

なんて言うようで、友達と行つたところろが、とにかくええ娘になつたど。そして行つたところが、殿様の息子が見に来ていたそうだ。

「あの子どもはこの子どもなんだか、ええ子どもだごど。あいつ嫁にしてみたいなあ」

と親さ願つたところが、姉は、
「あれでええごんだら、あまりええ」

「どこの娘だ」

と言うたらば、

「苦しんでいた、糠福という娘だ」

「ほんじゃらば、もらつて来てええか」

と。息子は親に許さつて馬さのつて、
もらいに來たど。そうすつど、おつかさ
は、

「あげなものは、分んね。妹をもらつて呉
ろ」

と。そうしたところあ、

「妹はいらない、姉でなくてはならない」

と。そして姉がもらわつて行つて、え
えあんばいに暮らせていただいたど。

く・い・こ・こ・むかし

おじいさんとおばあさんの、子ども持
たないで、正直に暮しつたどこじだな。

そのおじいさんとおばあさんが毎日働
いて、おばあさんが洗濯に川さ行つたと
ころが、赤い小箱と白い小箱が流つて來
て、

赤い小箱 こつちや來い

白い小箱 あつちや行け

と言つたところが、白い小箱は泣きな
き別な方さ行ぐ、赤い小箱はおばあさん
のどこさ來て、それを拾つて開けてみた
らば、めんごいくい・こ・こ入つていて、目

覺して見る目などしていただ。

「誰あこげなめんごいの流して寄越したんだべ」

と思つて、子どももいねがら、これをおがすと思つて、家さ連て来て、うまいものを食せて、何好きだというと、小豆飯さ魚かけて好きだなんていうように、二人でおがしたところが、ある日お天氣のええとき、車ひっぱって来て、

じんつあものれ クンクンクン

ばんさものれ クンクンクン

かますもつけろ

蹴もつけろ

と言つて、車を見て、

「疲れるべから、車さのんねえで行くから」

と言つたげんども、

「ええからのれ、クンクンクン」

なんて言わつて、車さのつたところがどこということなく、山さ、じんつあとばんちやのせて、くいここあ行つたば、広いとつてもええどこさつれて行かつて、そして、

「じんつあも降ろクンクンクン、ばん

ちやも降ろクンクンクン」

と言わつて、降て一服しつたところが、

鼻でクンクンクンと嗅いで、

「ここ掘れ、クンクンクン、ここ掘れ、

クンクンクン」

と言うから、掘ってみたば、いや宝物・金銀ざくざくと出はったど。そいつかますさ入っで、

「向うも掘れ」

というので掘ってみたば、美味しいものでも着物でも出来て、喜んでかますさつけて、

「また、のれクンクンクン」

と言わっで、

「今度はこわいがんべから、おらだひいて行んから」

と言うても、そんでも聞かないで、のれのとと言うからのったところあ、カラ

カラと疲れ気もなく、家さ帰って来て、そして、

「なんぼこわがつたべ」

なんて、足なのお湯でみな洗って呉^けて、

「ほんじゃ、寝てんなだぞあ」

なんて寝せてるうちに、隣の火もらいば^ばの稼^ばぎたくないばさま来て、

「いやいや、こつちの家では、なんと何をしたんだか、福しくなっていた。その話聞かせて呉^くろ」

「いや、おれのくいこはこういう風なことで、山さ連^せて行かつで、こうだ」

「ほんじゃ、まず」

と、火ももらわねで、

「まず、隣ではくいごこは宝物出して来て呉^けつじやど」

「んじや、あいつ借つで来らんね」

「そのくいごこ貸せ」

「いや、貸さんね。なんぼくたびつだべから、寝せつだどこだから、貸んね」

貸さんねと言うのを、びりびりと連^はて行つて、のれとも言わねの、のつて尻叩た

き叩たき、山さ行つたところ、掘れとも

言わんねな、掘つたところあ、とんでも

ない臭いものなどばり出きて来たから、怒^{こしやえ}つて、

「隣さばり宝物さずけて、おらだどこさ、こがえなものさずける。生かしておかん

ね」

と言うもんで、鋏で頭叩いて、キャンキャンと泣いて死んだのを、そこさ埋めて、

「松の木一本も立てて行くが…」

と言つて、松の木そこさ植えて帰つて来た。

まずくいごこ寄越さねもんだから、行つてみたところあ、

「そつけなくいごなど殺して埋めて来た。松の木一本立てて来たから、分るべ」

「こうした訳だど、じいさん」

と二人は泣き泣き団子^{たが}を持つて行つてみたところあ、まず、その木はおがつ

ておがって、

「死んでからまで、おらだどこ、こうして呉れつか、ほんじゃ、こいつでスルスでも拵えて残して置くか」

と言うもんで、ツルコン・マルコンと切って、スルスを拵えて、ひいてみたば、またじんつあ前さ、金^{かね}。ばんさ前さ銭^{ぜに}。ざくざくざくと落ちて、

「死んでからまで、こうしてくれつか」
と言うもんで、喜んで、また来てその話したら、隣ではまた、

「そのスルス貸せ」

と言うもんで、ビリビリ持つて行つて見たば、またまずいものなどばり出来た

もんだから、

「こつげなもの」

と割つて焚いて、

「まだよこさねから、行つてみつかなあ、何かしつたであんまいか」

とて、行つてみたらば、

「おらだどこさ、どこまで仇すつから、そつけなもの焚いてしまつた」

「ほんじゃ、灰でもええから持つて行くべ」

と。

「センチ（便所）の陰さ置いっださ」

と言うような塩梅で、その灰ばりも貰つて行くべと、泣き泣き灰をフゴさ

入つて貰つて来る途中で、灰が吹飛んで行つて、枯木さ花咲いたど。

「これはこれは見事だ。灰になつてからも、こういう風に、おらだどこ助けつじだ……」

と思つて、その話したど。

その話は殿様さ聞えて、

「枯木さ花咲かせるじいさんがいたどころ、咲かせてみろ」

と言わつて、

あやはちゆうちゆう

黄金　さらさら

チチン　ポン　パラリーン

と、灰をまいたところあ、ほんに見事

な花咲いてみんなに手叩^{はた}かつて、喜ばれてたくさんのお褒美もらつたど。

その話、また隣で聞いて、灰いっぱい持^たつて行つて、また殿様さ、来いとも言わんねのさ行つて、

「そこにいたのは誰だ」

と、とがめらつたところが、

「おれは花咲じじいだ」

「ほんじゃ、こつちさ来て咲かせてみろ」

と言うて、灰もつて

あやはちゆうちゆう

黄金　さらさら

と蒔いたところが、みんなの眼さ灰あ入つて、

「いや、にせものだ。にせものだから、これを牢さ入れろ」

なんて言わつて、牢さ入れらつたど。んだから稼ぎもしないで人のことばりうらやましくて、そうすつじど、罰でそういつた目に合うし、正直なじいさん、ばあさんがそういう風に授いて、金でも何でも授くもんだから、心掛けは大事だど。

狸　む　か　し

じいさん、ばあさんが一生懸命で働いていて、じいさんが山さ火野刈^{かの}つて豆を蒔いたりいろいろしていたところが、あ

る日豆蒔き行つて、

一粒まいたら千なれ

二粒まいたら二千なれ

と語つて、おじいさんが豆蒔きしつたど。そこさ狸あ来て、その棒杓^{ぼうくわい}さ尻掛けて、

一粒まいたら　腐つされろ

二粒まいたら　腐つされろ

と言うもんで、じいさんどさ語るもんで、

「この畜生!!」

と言うもんで、じいさんどこ半分おかしくてはあ、ちゃんちゃんちゃんと逃げ、またじいさんが蒔き始めつど、来て

悪態すつど。

「ほんがえな畜生!!」

と、家さ来て、

「ばあさん、ばあさん、こういう風なこ
と、狸あ来て、俺どこさ、悪いどこ語つ
から、あの狸を退治しなくてはなんね、
モツチ（とりもち）買って来い」

と。ばあさんにモツチ買わせて、棒杓
さでつつり喰付けたどこさ、それとは知
らねで狸あ来て、

一粒まいたら 腐っされろ

二粒まいたら 腐っされろ

三粒まいても 腐っされろ

と言うもんで、悪態した。それから今

度はじさま行つて、

「この狸殺してくれんべ」

と思つたところが、

「悪いことしねから、どうか助けてくろ」
「助けてくろなんて言うたて、逃げはさ
んねし…」

と、手と足ぎりぎりつないで、家さつ
れて来てちゃんと下げて、

「晚げ狸汁して食うように、ばあさん。
白く米搗いておけ、おれはあそこさ残り
を蒔いて来つからな」

と言うて、じいさんがまた山さ行つて
いるうちに米搗きしつたら、狸が、

「ばあさん、ばあさん、こわい（疲れる）」

「がんばあ」

「こわいな（疲れるな）」

と言ったところが、

「おれも搦^すいて助けっから、まずおれどこ放^{はな}してけねが……」

「いや、逃^にげて行くと、おれはじいさんにおん^{おん}つあれるから、さんね」

「いや、ほげなこと言わねで、また米搦^ひいてけっじど、白く搦^ひいてけっじど、ええがんばあ、そしてまたつながれっこで」
なんて、うんとばあさんとこ騙^{だま}したもんだから、ばあさん、

「そうか、ほんじゃ……」

と、放^{はな}して呉^くつじやどころが、

「ばあさん、こいつ、おれあ搦^ひくの雑作ないから、ばあさんが返さんなねこで」

と、こういう風に言わつて、ばあさんが白さ手入^{ていれ}つて返したところが、ダーンと狸がばあさんどこ搦^ひいてはあ、殺^{ころ}して、ばあさんの着物を着て、飯炊^いいて、ちやつちやつと、

「じいさん、蒔^まあげて来たか、まず。狸汁^じなどしつたごてはあ」

「ほうか、早^{はや}いがったなあ」

そして、じいさんのときさ、撓^{しな}いどこばり、自分は美味いとこの肉ばり食^くつて、
「いや、ひどいな、こりや。なんぼ古い狸^りだったんだか、あがえに悪態^{あくたい}する狸^りだ

から、確かに古い狸だったべ」

なて、じいさんが言うど、

撓いは道理

ばばだもの

と言うけあ、狸になつて、ビンビンと逃げて行が^いつで、何とも仕様ないんだし、泣いていたところが、兎がどつかから来て、

「じいさん、じいさん、なして泣いっだ」

「ばば、狸に殺さっだ」

「ほんじゃ、あがえな狸など、仇とつてくれつから泣くな」

と言わつて、まずじいさんが喜んでいたところが、狸のとこさ、兎行つて、

「狸殿、なんとしつた」

「まず、腹くつちいんだし、火さあたつていたとこだ」

「段々に寒くなるんだし、杉葉拾いに行つたらええんねが、焚きものとり」

「んだなあ」

なんて、二人で出掛けて、いっぱい拾つて背負つてから、兎は、

「腹痛^やめて、家さ行かんねぐなつたはあ」

と、腹痛みの振りしたところが、狸はそいつも知らねで、

「ほんじゃ、おれはおぶつて行くより他はなかんべ、おばれ」

と、焚きもの背負つてた上さ、ちゃん

と背負つて、兎はマツチをちやきんちやきんとしたど。

「なんだ、火付けつどこあんまえなあ」

「いや、そうでないごで、キリキリ虫でもあんべちや」

なんて。そのうちにマツチで火付けたところが、ぼうぼうと燃えて、兎は向い山さ、ピンピンと走つて行つて、

「見事、もえる」

なんて見ていた。狸は焼^やけ^ばた^して、二三日もよつてから来てみたところが、ウーウーとうなつていたもんだから、

「今度は、ヤケドの薬でも持つて行つてつけてけらんなね」

と思つて、南蛮粉など混ぜて、薬売りに来て、

「ヤケドの薬、ヤケドの薬」

とふれて来たところが、焼^やけ^ばた^した狸は、

「ヤケドの薬買うべ、なえだ兎、おれどこ、こがえに焼^やけ^ばた^しさせで…」

「薬売り兎と焚物売り兎あ別だべちやえ、む^こさ^がつ^たな、背^せ中^{ちゆう}焼^やいて。この薬さえも点^てけん^だら、じ^きに^治る」

「ほんじや、つけて呉^くろ」

なんて、背中出してつけてもらつたところあ、南蛮粉など入つた薬なもんだから、痛い痛いと、コロコロとしたのを

見て、兎はチンチンと逃げて行つてはあ、
「痛くていたべ。気味ええ。」

なんて。

「今度はなじよかして、仇とつて呉れんなね。土舟でも拵えて、川さ行くほかないべ。」

と、兎は自分が舟は木で拵えて、

「狸、なんとしつた」

「いやいや、あがえな葉塗ぬたくつて、何ほど苦しんだか、よっぽど良くなつたのだ」

「葉売り兎か、おれあ舟のり兎で、舟拵おこつて来たから、行つて雑魚でも獲つたらええんねが」

「ほんじゃらば、行つて遊んで来つかな。まず川さでも行つたらええが……」

なんて、途中まで行つたらば、

「お前の舟を才植さいいづちでタンタンとすつじど、うんと雑魚はかつかから、まずそこで叩はたかんねぞ」

そして、

「兎あ舟あ、ツエン、狸あ舟あ、ザクザク」

と言うようで、ツエンツエンと、兎はり行つたど。狸は雑魚食たいもんだから、タンタンと叩いたところが、水が、壊つだどこから入つて、ガホガホガホと水飲んで死んだかと思つたら、まだ生き

て穴さ入ったとこ見たど。

そうしたところが、腹溶かして大苦し
みした風だっけから、松脂いっぱい
取って行つて、

「腹とかしの薬、腹とかしの薬」

と言うもんで、また兎はふれに行つた
ど。

「いや、腹溶けて何とも仕様ない。いや
と・ん・な・ご・ん・だ・つ・た。貴様であんまいな」
「おれあ、そ・が・な・こ・と・知・ら・ね。腹止りの^{とま}
薬売りに来たなだもの。ほんじゃ尻の穴
出せ」

と言うもんで、松脂いっぱい、トント
ントントンとつめてもらったど。そうし

たところが、今度は苦しくて、腹パンパ
ンとなつて、また来てみたば、死んでい
たごんだけどはあ。そして、

「じいさん、まず仇とつて来た」

と言うもんで、喜んで、じいさんが子
どもいねんだし、ばさまいねんだし、そ
の兎を子どもになんねがと言うもんで、
大事にして兎を飼つたど。それから段々
家さ飼われるようになったど。

しっぺい太郎

ある山ん中の村に娘いたときさ、白羽
の矢立つて、その娘を神さまさ上げない

じど、田でも畑でも荒さつて、何とも仕
様な村あつたそうだ。

そして、武者修行の者が通りかかつて、
「今年はどこの娘なんだか」

と。家の人がみな泣いていたどこさ来
て、

「そがえな、神様は仕業をする訳あない。
何か、かにかの者だべ。んだからおれが
棺さ入つて行つて見んべ」

と思つて、娘の身代りになつて棺さ
入つて行つたところが、みんなは棺をか
つねで行つて、わらわらと置いて行つた
ところが、やつぱし丑の刻になつて、そ
の棺のぐるりを、

「丹波の国のしつぺい太郎に、このこと
決して話すなよ」

と語つて、三度廻つて棺の蓋とつたの
を見たところあ、冠などかぶつて、顔面^{つら}な
ど言うに言わんね面^{つら}して棺の蓋とつた
ど。その武者修行の者は、ヤツと立つた
ところが、それらは見えなくなつたど。
そして今度あ、

「こういうこと語るのだから、まず、ま
た何かあんべから、丹波の国さ行つて、
しつぺい太郎を尋ねて、そいつを退治す
るほかない」

と思つて訪ねてみたところが、しつぺ
い太郎さあ、犬だったそうだ。

そしてその犬をつれて来たど。

また白羽の矢立ったという話なもんだから、犬ききよつくと聞かせて、その犬抱いて棺いさ入つで置いてきたど。そうしたところが、また棺の蓋とつた。犬はひょいと出て、その武者と二人で戦つて傷付けたど。キヤーツという音すつから、明日でなくては分んね、と思つていたど。みんなは、食かつだと思つて来てみたところが、

「神さまでなくて別なもんだつた。おれあ傷付けてやったから、血落して行つたの、後ただしてみろ」

と、ずうつと離つたところに穴あるの

で行つたところが、そこに音すつからみたら、狒狒ひひだつけど。それをみんなで退治したど。

馬 と 犬

あるところに、馬と犬つれて、ある男が散歩して、きれいな牧場さ行つて、

「これは、おれは昼眠すつから、お前がたは自由に遊べ」

と言うて、自分が昼眠しつたところが、馬は喜んで、草あるもんだから、一生懸命で食べてる。犬は腹減らして、馬が背中に背負つてだ食物を、

「膝まづくと取られつから、膝まいて、おれどき食せろ」

と言うたどころあ、

「いや、主人が目覚ますど、みんなで食れつから主人が目覚ますまで、こらえていろ」

それでも腹へつて腹へつて仕方ないげんども、取つて食うようは出来ないんだし、一生懸命で馬ばり食つてだど。

そのうちに狼あ来て、馬は、

「狼来たから吠えて呉ろ」

と、馬が犬さ言うたげんども、

「主人が起るまで待ちろ」

と、こんど犬が言うたげんども、主人

が起きねんだし、狼にあちこち嚙ぶづがつで、苦しんだど。そしたらば、犬の言うには、

「分けて食つたり、いろいろすつど、お互に助け合つて、そんがえに苦しみすつこどなかつたべ」

と言わつたべ。

南瓜と栃の実

畑さ南瓜植えて、かまわず南瓜の蔓太つとくして、いっぱい実らせで、

「蔓さ一つ一つ南瓜なる。これはこがえに細い蔓さ南瓜なるなんていうものは、

どんなもんだ」

と思つて、ある日、栃の木の下さ行つて、雀止つていたところあ、上見つたば、
「こんな細い蔓さ、あがえに大きな南瓜なる。こがえに太い木の、大きなさ、こがえな小つちやな実なるなんて、こりや、神様は逆におくやつた。」

なんて、昼眠したところあ、ポイント栃の実に落ちて来らつて、鼻の先に小さいもの当つて、痛いと言つたところあ、鼻さ傷あつたど。

「いや、小さいたても、力もあるもんだ、神さまはそういう風に間違つたことはいないもんだ」

と思つたど。

雪　女　房

木小屋に一人いた男どこさ、ある時ええ女あ来て、

「働かせて呉ろ」

と。そして一生懸命で寒くなればなるほど、働く女だつたつて。

そのうちに子どもも出来たど。そして二人で一生懸命で働いて、子どもをおがして、裕福にもなつたところが、ある夕方、吹きあ吹いて行きもさんね時、そのオカタは出はつて行つて、そうして帰つ

ざあないど。

そうしたところあ、なんぼ探ねても女
はいなくなつたど。

そしたら、女は雪の精で、「雪女房」だつ
たど。

幸福な城

旅をして、何かあるかと、ずうつと廻つ
て来たとき、あるどき、立札たつていた
の見たところが、その向うに川があつて、
そのこの向いに石の像があつて、それを
持つて向うの山さ一直線に登つて行くど、
幸福を得られるという立札、見つけだず

もな。

そうすつじど、七人の勇士たちは行つ
てみたところが、急流な川で、向う側さ
など行かれる川でなかつたど。一人の勇
士は、

「おれは勇気を出して、こういう風に全
国をめぐるたもんだも、何かおれが功現
わさねで、行かんねごで」

と言うことで、その川さ入つて、流さつ
たり、いろいろして、ようやく岸さ辿り
ついたば、やつぱし人の像ある。

「ああ、これの「たがごんだべ」

と思つて、その石を持つて、山さ一生
懸命に登つて行つたところが、広いどこ

あつかつたど。それからずうつと行つたところが、松の木なのあつて、城みたいなものあるこんだど。

「これは、このことか」

と思つてゐるうちに、武装した者があちこちから来て、数十人の者が集まつてくるような…。

「いや、おれは騙さつじや、ほんじえ（それで） こうした以上、仕方ないから、一人でも余計におれは切つて死ぬつたても、勇気出さんなねと思つて、刀の束さ手当てて待ちでいたど。ところが武装した者は、みな膝まづいて、礼^{れいしやく}積した。

「これはこれは、今までこがえな勇気あ

る人は来てくれたことはない。この城はこの位な人でないど持たんね。殿様は死んだもんだから、城持つ人がいなくて困つていたから、この城を受けもつて呉^くろ」

と、こう願わつて、そこさ行つて幸せになつたど。んだから、男というものは、どこまでも勇気を出さんなねもんだど。

狐 女 房

殿様から山狩りをしろと、信太が森といたところに行つたところが、狐あいた。狐は見ない振りして、別なところさあえ

べ・と言うと、その狐のところを助けて、別なところさ行つて狩したところが、ある日、そのヤスナという人の許嫁が一寸前になつたから来たところだと、ええ女が来て、ヤスナのところさ来て、家さ入つて、子ども生んで、働いていたところが、ある日また一人前になつた本当の許嫁が親に送らつて来たど。なんだかヤスナどこさ女あいた。不思議なごんだと思つて、どっちにも同じ娘だったそうだ。そして先に来た女は、

「いや、おれは居るべきでない、おれは助けらつた狐だ。恩返しに来たのだから、すぐに行くべと思つていたげんども、自

然永々になつてしまつた。子どもまで出来たげんど、おれは此処にいらんね」

と思つて、信太が森さ、

会いたくば

尋ね来てみる

信太が森

という字を障子さ書いて逃げて行つたど。そうして、子どもは同じおつかさだげんども、乳もないげれば、泣いて泣いて仕樣ないもんだから、その狐をたずねて、信太が森さ一夜連て行つて姿見せてから、あきらめさせんべと思つて、その子ども背負つて行つたところが、まだ同じおつかさになつて、乳を与えたりして、

あきらめるように、元の姿になつて呉^くろと頼んだところあ、狐の姿になつて三度ぴんぴんとはねて立つて行つた。

そうすつど、子どもは、恐つかない、
と言つて、

「お母さんでない」

と、あきらめて帰つて来たど。生命助けてもらつた恩返しだつたど。

靴屋と金持

靴拵えと、金持な人いだつたど。

んで、その靴拵えは毎日励んでは食ひ、
励んでは食ひ、そうして毎日朝げから歌

うたつて本当に楽しく働いている。隣の金持な人は、毎日毎日心配で、

「この金は泥棒に入られつど悪い、いや何としたらええ」

と、寝るときは寝るときで、心配で寝らんね。起きては起きたように、何としたらええんだか、金と、起きては眇^{すが}め、寝ては心配という人だつたそうだ。

あるとき、心配するあまり、隣の靴拵えは、朝から晩まで楽しく唄うたつてゐる。

「まず、聞いて来らんね」

と。

「お前でなんぼ金貯まつたべ」

と聞いたら、

「おらだ、今日、こうマメで働くじど、まず食うものは買われるし、働いているくらい楽しみなものはない」

と教えらつたど。

「ほんじゃ、金なんざあ、余ったもんだから分けてやんべ」

と思つて、分けっこして持つて行つたところあ、ありがとうと言つたげんども、今度はこの靴拵えは、貰つてみつど、それも心配で、

「これは、見つけられつど…、戸棚さでも仕舞つておくと、妻に盗られつか、いや、こいつどこさ仕舞つておいたらええ

んだか、土でも掘つて、埋めつだらええんだか、泥棒に盗まれつか…」

なんて心配で、歌もできなくなつた。

「いや、金なんざあ、持つべきでないもんだ」

と、返して来たど。

代りの首吊り

貧乏で貧乏で何とも仕方なくて、借金もさんね、食うも食んねような有様な男がいて、これあ、

「死ぬより他ないもんだ」

と思つて、死ぬには縄でもなつて首吊

りでもして死ぬべと思つて、縄ないして、

「どこで死んだらええか」

と、その縄持^{たが}つて、ずうつと村のはん

ずれさ行つたところが、これは本當にみだれのない、ええあんばいの小屋あつけど。ここはええ場所だと思つて入つてみたば、まず吊るじど落ちて来るようなどごばりで、何とも仕様あないなあと眺めているうちに、その横柱だら落ちて来まいと思つて見たところが、釘あつたけど。その釘さええあんばいに引っかけ、吊るべと思つたところが、壁はドサドサと落ちて来たど。

その中から錢あジャランジャランと落

ちて来たど。

「これはこれは、誰が隠しつたのだから、何だべ」

と考えていたげんども、その錢みな拾つて、家さ帰つていたところあ、その後さ、その錢隠しつた人が、なじよなつていたんだかと思つて、来てみたば、その錢はなくなつていたごんだと。

そうすつど、

「困つたごんだ。この錢たよりにしていたの、無くなつていた。おれあ死ぬより他ざあない。まずなじよしたらええか」
と思つていたら、その縄みつけて、そ

の人は首吊りして死んだど。

鶴 女 房

助けらつじや鶴が来て、

「おれの姿見ねでける」

と言うて、機師^{はたし}たててくれたところが、

テンテンという音するもんだから、見たくて見たところが、助けた鶴が赤裸になつて、ググツとむしつては、ツェン。

あちこちからググツとむしつてはツェンとして、パタパタと織るのだけど。

そして女は機師から降りて来て、

「おれがもう少し機織りたいと思つたげんども、おれは人に見らつじやもんだから、半分に織^おんだ」

ど。

かもしかと鳥と亀の子

かもしかに鳥に亀の子がいて、かもしかが狩人に見つけらつて、罾^わに掛つたど。

そうすつじど、なじよかして助けらんなねと思つて、鳥あ行つて、それをチョクチョコクとつついて、取つて放したど。

そうすつじど、逃げたというもんで、狩人は追かけたど。道をずうつと、鳥が先になつて教えて、そうしてゐるうちに、亀の子はのたりのたりと来て、

「あまり、いつまでも鳥あ来ないし、何

としまったんだか」

と行つたの、そいつ見つけて、

「この畜生、こいつを晩げのお菜かずにすんべ」

と思つて、狩人は抑えて、晩げの料理にすんべと思つたど。

そうすつじど、そいつを聞きつけて、
もしかか**は**跛びつこの真似して、ピコンピコンピコンピコンと行つたど。狩人は、
今度こそ、もしかかを抑えてくれんべと思つたど。そして段々に広ひろさかつて、
行つてゐるうちに、また烏・亀の子を助けて、家さ歸つて、とうとうかもしか獲りばぐつたど。みんな仲よくさえもすつじ

ど、助かるという話。

橋 と 大 根

「お前はどこさ行く」

「南に大變な高い橋あるどから、見に行くだどこだ」

と。そして南の人は、

「お前の方に、大變な大きな大根ある風だという話聞いてるごんだ」

「ほんじゃ、ここで話したらええがんべ」

「まず橋というものは、橋の上から落ちて死んだ人もある。そんでこの橋さ、いつ、足あ橋の下さ届くかと思つて、尻掛けつ

けて足出したげんども、一月たつても、
二月経つても、橋から水まで足あ届かな
い。いつ届くか、そういうことだから、
お前わかんべあ」

と言つた。そうすつと片一方の北の方
の人は、

「おらえの方の大根だつても、三四年経
てば南の方まで届くべ」

「そこ考えて、別れるはあ」
と、別つたど。

じいさんと若衆

よく働くおじいさんいだったど。

「あがえなこと働いて毎日楽しんでゐる。
直きにも死ぬも知らないで……」

おじいさんどこさ話してみつかと、三
人の若衆はいたど。

「おじいさん、おじいさん、なしてほが
えに働いて、これから先、食いもさんね
もの植えたり、いろいろしてゐるごんだ。
それよりまいどの話でも考えて楽しんで
方がええでないか」

「いや、人間が働らくくらいええこと
ざあない。これだつても死んでから、お

さんがこうして呉^けたほでにええがったとか、いや美味いとか言われるほでに、楽しみなもんだ。んだからおれあ一生こうして楽しく働いていて、お前がたなんて一生、八十になってから、そがえに生きらんねんだから」

と言うたら、

「若衆にだつても寿命というものは、若いからと言うて死なないものでない。おれはお前がたさ、まず墓詣りして呉^けねこともなかんべ」

と、おじいさんが言うたど。

そうしたうちに、その若衆も段々に成長して、おれはアメリカさ行きたいの、

おれは軍人に行きたいの、木こりになりたいのと言うたど。

アメリカに行きたいというた者は波止場で、船あ沈没して死ぬ、軍人に行きたいなんて言うのは、名譽の戦死で死ぬ。

一人は木こりになって、木から落ちて死ぬ。みな三人が死んで、じいさんがお墓詣りに行つて、

「あがえなこと言うたつけが、おれはまだ生きてた。若いたてもこういう風になつじだなあ」

と言うたことあるから、やつぱし…。

狼 と 狐

ある山に、年取ったライオンが王様になつて、狐だ、狼だ、いろいろ寄せて、

「おれは若返る薬もつて来い」

と。そうすつじど、みんな機嫌とつて、

何だかんだと持つて行^いんけんども、狐だけは賢いもんだから、そうしないで見たところ、狼も、

「あの狐というものは、何じだか、ずる賢いじだが、何だかで、王様さいつこう機嫌とつて何かよいことなど来ないから、悪いこと告げてくれんべ」

と、かたくなにして、

「狐というものは、悪い心もつてゐるから、王様、あれは油断がなんね。王様など死んで呉れつどええと考へてゐるのだから、いつこう面のぞきなどしないのだ」

と、狼は語つたど。そうすつど、怒つてライオンが、

「狐を呼ばつて来い」

と。そうしたところが、狐は一生懸命で若返るようと、そつちこつち騒いで、王様さなの、あがること出来なく騒いでゐる。あつちさ行つては何あええか、かにあええかと聞いて、今一生懸命なところだ。

あるときさ行つて聞いたところあ、こ

それは狼の皮剥いで、赤むくれにして、その皮を焼いて狼を食うじど、治ると、こういう風に教えらつて来た、とその狐あ言うたごんだど。そうしたば怒つていたのさ、狐はそういう風に言うたもんだから、王様、御機嫌悪くて、

「ほんじゃ、狼を呼ばつて来い」と。そうしていた前で、

「おれあ、狐のこと、そう王様さ言うたから、仕方がないから、王様はそれ食つて若返るごんだら、仕方がない」

と言うて、皮剥つたそうだ。んだから、あまりええこと語つて、自分の功あらわすように、人をけなしてはなんね。

卵 う り

ある暮方、卵うり来たのさ、

「なんぼだ」

「十円だ」

と言うのさ、

「ほんじゃ高いから、三つ十円にしろ」

とか何とか、また値切つたそうだな。

そしたところが、

「そがえなことして、卵はもうけがない

し、売らんね」

「ほんじゃ、ここに置いて、なんぼあつ

か数えろ」

というもんで、少し斜めになった卓子

の上さあげたど。そのうちに転ぶもんだから、卵をかかえているうちに、旦那も出てこないで、何とも仕様ないうちに大出はつて来て吠えらっじやもんだから、魂消て手とつたら、みな落ちて、みなつぶっただど。んだから三つ十円に買うごではあと、買わっじやど。

糞く ら え

八百屋さんが、ある旦那さ行つて、
「菜買つて呉ろ、一貫目なんぼだ」

「ほんじゃ、高いから××にまけろ、いやこうだ」

と言うもんだから、ご・し・や・えで八百屋は「糞まくらい」と言つたもんだから、ごしやげらせてもらはんね。言う通りに買うべと思つて、呼ばつて、

「言うなりに買うから置いて行け」

と、こんどは、

「いや、目方なじよだ。いや、かじよだ」と言うもんで、とても久しく掛つたうちに、八百屋は腹減つて、台所にある焼餅食つたごんだ。そうしたところあ、いや腹減つて知らねふりしていんべと思つたげんど、そのうちに旦那出はつて来て、もじもじとして、

「おれも腹減つて仕様なくて、焼餅くつ

たごんだ」

「はあ、食ったええげんど、あれは、ねずみ殺し入っていたのだから、あれ食ってからざあ、生命なくなるな」

と、こう言うたずも。そうすつじど、

「それは困ったごんだ。なじよしたら、これは体さ毒になんねえか」

と言うたところ、

「おれあええこと教える」

と、旦那。

「それさ、糞食うと治る」

そしたば、生命いたましいもんだから、八百屋は糞食ったそうだ。そしたば「糞くらえ」と言うたもんだから、旦那さ向つ

て糞食^かんなねくなつたど。

ねずみの嫁

ふくろうはねずみいっぱい獲つて、眺めつたところが、坊さんどころさ、バツタリ落したど。坊さんがそのねずみ持^たつて、

「人間がねずみとか、ノミとかに生れ返るそうだ。そのねずみはなじよな人間だったんだか」

と思つて、魔法使ひしてみたところが、十五・六才になるええお姫さまになつたど。そしてこんど、その姫さ言うたど。

「お前なじよな夫さ嫁ゆめきたい」

「おれは世界中の一番強い者さ行きたい。
考えてみっど、お天道さまより偉いものはなかつた」

お天道さまさ行つて、

「どうか、この娘をもらつてくろ」

「いやいや、おれより偉いものは、まだいた」

「その偉い者ざあ誰だ」

と聞いたところが、

「雲だ。雲はおれの照らしつたどこさ来て、おれのとこ隠すものは雲だ」

それで雲さ行つて、

「ええ娘を嫁にもらつてもらいたい」

「いやいや、おれよりまだ偉い者あいた」

「何者だ」

と言つたところが、

「風だ、風はなんぼ雲がいっぱいにして
みんなという内に、風あ来ておれどこ
無くす。そういう力をもつてる」

「そうか」

と。それから風のところさ行つたら、

「それは山だ」

「なしてだ」

と言つたら、

「おれあ、なんぼ山さ行つて、その山を
越えすべと思つても、越えすことも出来
ないし、破ることも出来ない」

そしたところが、ポエンという音すつから見たところが、大きなゴムマリあ飛んで来た。山越えして…。そうすつじど、

「これくらい偉い者あない」

と思つて、

「マリ殿、マリ殿、これを嫁にして呉くろ」

「いやいや、おれより強いものも、偉いものもいた」

「何だ」

「ねずみだ。ねずみはおれが、こがえしてても、いつか齒立てらつて、破られつど、ペチャンコになつてしまうから、ねずみより偉いものはない」

と、とうとうねずみはねずみに返つて、

あとがき

海老名ちやうさんとお会いしたのは、昭和四十一年の春のことだとおぼえている。もの柔らかい言葉使いの中から、昔話を語ってくれたのが、最初においた「牛方山姥」の話であった。八十一才になったのに六十才ぐらいにしか思えない。こんどまた語ってもらって気付いたことだが、語りは連綿として続き、一つの話に息を入れる場が二つか三つしかないとさえ感じたものだが、そのような語り口が、文章にすると消えてしまうのは残念である。

海老名ちやうさんは神官の家に生まれ、父に伝説や昔話を聞いたほかに、古典の中から読んでもらったり、聞いたりしたものも思い起こして下さった。「二宮金次郎」「野中兼山」「五厘かけて一厘」とか「三韓征伐」(日本書紀)「阿波の徳島十郎兵衛」(浄瑠璃)「牡丹灯籠」(講談)なども語って下さったが、この集には入れなかった。しかし、今迄この地方で聞いたことのない「馬と犬」「幸福な城」「靴屋と金持」「代りの首吊り」「かもしかと烏と亀の子」「橋と大根」「じいさんと若

衆」「狼と狐」「卵うり」「糞くらえ」「ねずみの嫁」などは、昔話研究に大きな収穫なのではないかと自負できよう。そのような話で、題目だけ思い出されたものには「お糸唐糸」などがあるが、話は聞かれなかった。残念である。

ちやうさんは、また子どもの頃、近所のお針の師匠さんのところで昔話をよく聞いたという。神官という家柄、そんなものが、ちやうさんの昔話に、あるいは見ることができようか。

この集をつくるに当り、同学の先輩、奥村幸雄氏、及び海老名伊都氏（共に荒砥高等学校教諭）に多大の御便宜をいただいた。話者へと共に両先生及び海老名家に深く感謝申し上げる次第である。

昭和四十三年三月

牛方と山姥
海老名ちやう昔話 第一集

昭和四十三年三月三十日 発行

編者 武 田 正

山形県南陽市三間通

山形短期大学民話研究センター資料叢書

牛方と山姥

海老名ちやう昔話 第一集

*本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成二十年一月三十一日

山形短期大学民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

山形短期大学附属図書館内

(電話)〇二三―六八八―七五四四

山形短期大学民話研究センター資料叢書 既刊（再刊順）

- 『西川町の昔話』（一九七五年九月発行、二〇〇六年三月再刊）
『むかしあったけど』（一九七五年二月発行、二〇〇六年三月再刊）
『米沢市築沢の昔話』（一九七二年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）
『米沢市塩井の昔話』（一九七三年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）
『安楽城の伝承（一）』（一九八四年四月発行、二〇〇六年三月再刊）
『安楽城の伝承（二）』（一九八五年四月発行、二〇〇六年六月再刊）
『安楽城の伝承（三）』（一九八五年十月発行、二〇〇六年六月再刊）
『高畠町和田の昔話』（一九七九年八月発行、二〇〇六年七月再刊）
『及位の昔話（一）』（一九八〇年八月発行、二〇〇六年七月再刊）
『及位の昔話（四）』（一九八〇年十二月発行、二〇〇六年十月再刊）
『及位の昔話（五）』（一九八一年二月発行、二〇〇六年十月再刊）
『佐兵ばなし』（一九七一年一月発行、二〇〇七年四月再刊）
『まま子いじめ 米沢市六郷・宮井の昔話（一）』

（一九七四年四月発行、二〇〇七年四月再刊）

『かっぱの硯 長井市・米沢市六郷の昔話』

(一九七四年七月発行、二〇〇七年四月再刊)

『行けざんざん 小国町昔話集』(一九七六年九月発行、二〇〇七年四月再刊)

『お婆の手箱(一) 阿部キヌオさんの語り』

(一九七七年四月発行、二〇〇七年七月再刊)

『及位の昔話(二)』(一九八〇年九月発行、二〇〇七年七月再刊)

『及位の昔話(三)』(一九八〇年十月発行、二〇〇七年七月再刊)

『牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第一集』

(一九六八年三月発行、二〇〇八年一月再刊)

『続 牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第二集』

(一九六八年十月発行、二〇〇八年一月再刊)

『続々 牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第三集』

(一九六九年一月発行、二〇〇八年一月再刊)

『牛方と山姥(四) 海老名ちやう昔話 第四集』

(一九六九年四月発行、二〇〇八年一月再刊)